Launched
1978

そのままの救い

りゅうこくブックス
135

龍谷大学宗教部

そのままの救い

龍谷大学「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現できる心として以下５項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこその心であり、生き方です。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求め真実に生きる「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共存を願う「平和」の心

目次

浄土真宗はじめの一歩　能美潤史　5

ものみな金色（こんじき）に輝く　徳永一道　29

「仏教を理念とする社会実践」～自死・気候危機への対応　竹本了悟　47

半身の死を生きる　川添泰信　77

お釈迦さまからのメッセージ ―― 生きるということ ――　内藤昭文　99

唯信仏語 ―― 愚者に落居する ――　深川宣暢　135

龍谷大学宗教部は、大学内外からお招きした講師の講話・講演を活字化し、「建学の精神」を普及し体現するために『りゅうこくブックス』を刊行しております。

宗教部主催の法要・講演会には以下のようなものがあります。

・授業期間中　毎月十五日　深草学舎　顕真館にて　お逮夜法要

・授業期間中　毎月十六日　大宮学舎　本館にて　ご命日法要

・授業期間中　毎月二十一日　瀬田学舎　樹心館にて　ご生誕法要

・毎期一回水曜日　顕真アワー

・五月二十一日　降誕会

・十月十八日　報恩講

・公開講演会　など

ブックスを講読していただくとともに、可能であれば各会場にもおまいりくださいませ。

（二〇二一年四月十五日　お逮夜法要）

浄土真宗はじめの一歩

能美潤史
（文学部　准教授）

能美潤史（のうみ じゅんし）

1982年生まれ，広島県出身。
2005年　慶應義塾大学文学部国文学専攻卒業。
2010年　龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻修了。
2013年　博士（文学／龍谷大学）。
2009年　浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室研究助手（～2014年）。
2014年　龍谷大学文学部専任講師に就任，現在に至る。

【著作】

「『願生帰命弁』と『興復記』」（『仏教文化研究所紀要』51／ '12年）
「「タスケタマヘ」の総合的研究」（博士論文／ '13年）
「蓮如の表現に関する一考察」（『光華会宗教研究論集』4／ '13年）
「親鸞の表現に関する一考察 ―漢文訓読語及び和文語の使用から―」（『真宗学』132／ '15年）
「真宗談義本と五悪段」（『浄土真宗と社会』／ '16年）
「無年紀の御文章の制作年代について」（『浄土教思想の成立と展開』／ '17年）
「親鸞自筆『教行信証』に付された角点の基礎的研究」（『言語文化の中世』／ '18年）
「御文章」における「尼入道」の検討：一語説・二語説をめぐって」（『真宗学』141･142合併号／ '20年）

等ほか多数。

弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

（『歎異抄』／『浄土真宗聖典―註釈版―』831頁）

ようこそおまいりくださいました。本日は「浄土真宗はじめの一歩」という講題を付けさせていただきました。四月から入学された一回生の方にも解り易いように心掛けてお話させていただきたいと思っています。これまでに何度もお逮夜法要にお参りしてくださっている方は「もっと仏教の専門用語を使ってほしい」と思われるかもしれませんが、初めてお参りして下さった一回生を意識した「はじめの一歩」です。どうぞお付き合いくだされば幸いです。

まず、少しだけ自己紹介させていただきますと、私は来年四〇歳になるのですが、娘はまだ三歳です。その娘が今年四月から幼稚園に入園しました。その幼稚園の園庭が大宮学舎の私の研究室の窓から見えるのです。私が研究室でパソコンに向かって仕事をしていますと、窓から娘が遊んでいる姿が見えるので、「このまま時が止まってくれたら良いのに」と思うほど幸せを噛みしめながら過ごしております。しかし、仏教では「あらゆるものは無常である」と説かれておりま

すので、娘の一瞬一瞬を目に焼き付けながら過ごしていきたいと思います。自己紹介になったでしょうか？

ある年の「仏教の思想」の思い出

龍谷大学には、「仏教の思想」という必修科目があります。これは、どの学部に入った皆さんにも履修していただくものです。

私は、非常勤講師の頃から考えますと十年以上この科目を担当しています。もちろん入学者には仏教徒でないという方もおられますが、どのような学生さんに対しても「仏教の魅力や普遍的な価値を伝えていきたい」と思いながら試行錯誤して授業をさせていただいています。

さて数年前、ある学部の「仏教の思想」を担当していた時のことです。私は「仏教の思想」の授業では学生が座る位置を座席指定しています。そのとき、たまたま一番前の席になった学生さんがおりました。毎週の授業中、彼女はビックリするぐらいつまらなさそうな顔をして受講していました。本当に「この世にこんなにつまらない事があるのか」という顔をしているわけです。

時々、急に真面目な顔つきで「やるぞ！」という雰囲気を出すのですが、そこからおもむろに手帳を出して、真剣に手帳の整理を始めたりします。さすがにそれは注意しましたけれども、とにかく、どれだけこちらが準備をして一生懸命授業をしてもなかなか興味を持って聞いてくれませんでした。

そんな調子で前期が終わり、後期になっても授業中の彼女は相変わらず授業の内容に興味を持てていない状態でした。そしてある日、授業後にその学生さんを呼び止めて、「君は授業に集中できていないみたいだけど、仏教の話ってそんなにつまらないかな？」と聞いたんです。そうすると、「はい、興味ないです！」と言うわけです。非常に正直な学生さんですね。しかし、さすがにそう言われると私も躍起になって、「君の人生において、今は思い悩むようなことがなくても、これから先、どうしようもなく悩むことがあったり、苦しむことがあったりした時に、仏教の考え方が何かヒントになる機会があるかもしれませんよ。仏教を学んでおいて良かった、と思うことがあるかもしれませんよ。」と言いました。そうするとその学生さんは「間に合ってます！」と言うんです。その返答にびっくりしながらも、私は「間に合ってるって、どういうこと？」とまた訊ねてみました。すると彼女は、「私はどんなに辛いことや苦しいことがあっても、

絶対に癒される方法を持っていますから、宗教は必要ないんです。仏教もいりません！でも単位は欲しいです！」と、胸を張って言うんですね。その返答に苦笑しながらも、絶対に癒される方法と言われると気になりますので、「絶対に癒される方法って何なの？」と訊ねると、

「私は苦しいことや辛いことがあったら京都市立動物園に行くんです。そして、動物園に行って大好きなレッサーパンダを見るんです。どんなに辛いことがあっても、あそこのレッサーパンダを見ると癒されるんです。嫌なことも忘れられるんです。」と答えてくれました。

それを聞いて、私もまさかレッサーパンダが出て来るとは思っていませんでしたから、「そうか…。レッサーパンダか…。」とつぶやいただけで、その日は彼女とそれ以上は話しませんでした。これ以上、無理にこちらが「仏教ではね」などと何か話せば、彼女が仏教嫌いになってしまいそうな気もしました。しかし、この出来事はずっと私の胸に引っかかり続けました。

この学生は当時十八歳という若さであり、もしかしたら彼女はまだ言葉にならないほどの苦しみ、身が裂けるほどの苦しみには、幸いにも出あっていなかったのかもしれません。たとえば、家族を亡くすといったような、そういう大きな苦しみに出あった時に、レッサーパンダを見れば苦しみが消えるのか、忘れられるのか。きっとそういうことはないでしょう。たまたま、彼女は

まだこれまで、レッサーパンダを見ればなんとかなってきたのかもしれません。

それから二週間ほど後、彼女に「君にとって人生の苦しみって何だろうか？」と聞いてみました。すると、「とりあえず、最近一番苦しかったのは、バイト先の店長に怒られたことです。」と教えてくれました。確かに、バイト先の店長に怒られた時は、レッサーパンダを見れば忘れられるかもしれません。

しかし、本当に胸が張り裂けそうな苦しみに出あった時に、レッサーパンダを見ればレッサーパンダに救われるということはありえません。そもそも、贔屓にしているレッサーパンダもいつか死んでいきますので、ずっと頼りにしていくこともできませんよね。

そして、もう一つ気になったことがあります。それは彼女が、レッサーパンダを見れば「癒される」と言ったことです。レッサーパンダを「絶対的な癒し」と彼女は言いました。この「癒し」という言葉に引っかかったのです。

「癒し」と「ドジョウ豆腐」

学生さんと先ほどのようなやりとりがあった頃、実は妻が出産を間近に控えていました。そこで、ある週末に妻と図書館に子育て関係の本を借りに行くことになりました。図書館に行き、子育て本のコーナーに行くと、妻が色んな本を見て、その中から「これ良いよ。」と言って何冊か本を私に渡してくれたんです。

それらの本には、「出産と授乳以外、子育ては全部父親にもできる！」「イクメンを目指せ！」とか、そういったタイトルばかりが並んでおり、これは、なんかちょっとヤバい流れだな、と内心思いまして、渡された本をかかえて、「他の本も見てくるね」と言って、その場を離れたんです。

そして図書館を歩き回っていますと、「癒しの本のコーナー」というのがありました。先程お話しました「仏教の思想」の学生さんとのこともあり、ちょっと気になったもので見てみましたら、三百冊くらい癒し関係の本が並んでいました。凄いなあ、こんなに癒しの本ってあるんだなあと驚きました。そこで、ぼんやりと本棚をながめながら、「癒し」という言葉について少し考えてみました。そして、「癒し」はある料理に似てるんじゃないかなあと思ったんです。

皆さんはドジョウ豆腐という料理をご存知でしょうか？　ドジョウ地獄とか、地獄鍋ともいうそうです。このドジョウ豆腐という料理は、鍋に水と豆腐を入れて、そこに生きたドジョウを入れて、蓋を閉じて火をつけるんです。そうしたらどうなるかというと、ドジョウも最初は平気なんですが、段々と鍋の中が熱くなってくる。そうなったらドジョウはアツいアツいともがいて冷たいところを探すんです。そして、豆腐にたどり着くんですね。豆腐はまだ火が通っていなくて中が冷たいですから、ドジョウはそこに頭をつっこんで、どんどんどんどん中に入っていくんです。

豆腐に入って少しの間、ドジョウは「ここは冷たい、助かった。苦しみから逃れることができた」と思って安心するんでしょうけれど、結局、その後どうなるかというと、豆腐の中にも熱が入って、結局ドジョウは豆腐の中で苦しんで死んでしまうわけです。最終的にフタをあけるとドジョウが全部豆腐の中に頭を突っ込んだまま煮えているいという恐ろしい料理です。

これは私の考えですが、「癒し」は、目の前に苦しみがあるとき、そこからちょっと目を逸らして苦しみを直視せずに現実逃避している、そういうものなのではないかと思うんです。結局、苦しみの根本は「癒し」では解決されていないのではないかと思います。

ドジョウ豆腐のドジョウも、一旦は豆腐の中に入って熱さから逃げられるけれど、数分で苦し

みがやってきて、最終的には煮えたぎって死んでしまいます。豆腐の中で一時的には癒されるのかも知れませんが、根本的な苦しみの問題は何も解決していないわけです。

私たちは生まれたからには、この身に様々な苦しみを受けていかなければなりません。「癒し」は、その場しのぎで小さな苦しみに対処していくことは出来るかも知れませんが、私たちの人生における苦しみの根本的な解決にはならないのです。

勿論、「癒し」を全否定するわけではありませんよ。私も家に帰ったら、とりあえず冷蔵庫に直行してビールを飲むというのが一日の癒しの時間ですし、ビールは大好きです。それを否定するわけじゃないんですが、ただ、「癒し」には、「人生の苦しみの根本」を解決していく力はないということを言いたいのです。

「仏さま」より「みのもんたさん」？

仏教では苦しみがいくつかに分類されて説かれています。大切な人と別れる苦しみ（愛別離苦）・欲しいものが手に入らない苦しみ（求不得苦）・嫌な人とも会わなくちゃいけない苦しみ（怨憎会苦）

などですね。

そういう苦しみを根本的に解決していける、あるいは超えていけるような力、それが宗教であり、仏教であり、私にとっては浄土真宗がそれにあたります。

今日は「浄土真宗はじめの一歩」というタイトルですので、浄土真宗という教えはどのような教えなのかということについて少しお伝えできればと思います。

浄土真宗の教えの中心は、阿弥陀さまという仏さまです。その阿弥陀さまは、「必ずあなたを救いますよと」というお約束をしてくださっている仏さまです。そのお約束のことを「本願」といいます。救いの根本となる願いですから本願です。二回生以上の方は一回生のときに仏教の思想で『仏説無量寿経』について習ったと思います。阿弥陀仏の本願はその『仏説無量寿経』に説かれています。

本願には、「信心」と「念仏」という二つのことが大きなポイントとして出てまいります。これを聞いてみなさんどう思われるでしょうか。

「なんだ、信じて念仏すれば救われるというお約束か、そりゃあ楽だなあ。えらく簡単なこと

じゃないか。浄土真宗は楽でいいなあ。」

と、思う人もいるかもしれません。しかし、ここで良く考えてほしいのです。

まず先に「念仏」についてですが、これはすなわち南無阿弥陀仏と口に称えるということ。あるいは、もし称えることに差し支えがあれば、心の中で思うだけでも結構ですけれども、とにかく南無阿弥陀仏という言葉を言ったり思ったりする。それは確かにやりやすいことかもしれません。しかし、問題はもう一方の「信心」の方ですね。阿弥陀さまが救ってくださるというそのお約束を信じるということですが、これって実はかなり難しいことです。

私がお坊さんの資格をとってすぐ、今から二〇年ぐらい前のことです。あるお宅に午後一番の時間におまいりで伺いました。おばあちゃん一人のお宅です。一〇分ほど前につきましたので、お宅の外から「ごめんください」と声を掛けたんですけれど、全然出てきてくれません。

うちの地域の風習で、お坊さんがおまいりに来た時は、玄関ではなく仏間の縁側から入るという習慣があります。外から声をかけても出てきてくださらないので、次は仏間の縁側から入って、戸をあけて「ごめんください」と言いました。大きい声で言いましたが、全然出て来ていただけ

ません。

しかし、奥からテレビの音が聞こえるので、ご在宅であることは間違いない。良く知ったおばあちゃんでしたから、そのまま奥に入って、テレビがある部屋にむかって「ごめんください」と大きな声で言ったら、そこでやっと気付いていただきました。「気付かずにごめんなさいね」と出て来られて、そのままおばあちゃんと二人でお仏壇でおつとめをしまして、終わってからお茶とお菓子をいただきながらお話をしました。

「おばあちゃん、さっき一生懸命集中してテレビ見てましたよね。何見てたんですか?」と聞きましたら、「私はとにかく昼になると、みのもんたさんの番組を見るんですよ」と教えてくれました。

若い方は知らないかもしれませんが、昔、お昼に「思いっきりテレビ」という番組でみのもんたさんが司会をされてたんですね。

「そんなにおもしろいんですか? 何がおもしろいんですか?」と聞くと、「この番組はね、毎日これを食べたら長生きできる、元気になるって食材を教えてくれるんですよ。毎日これを見て、食べたら長生きできるって言われたものをスーパーに買いにいって晩御飯にするんです」と仰る

んです。その日は「ひじきをたべたら五年は長生きできる」と、みのもんたさんが言っていたそうです。それを聞いて、私も「じゃあうちも晩御飯はひじきにしようかな」なんてことを話して、その後にも何軒かおまいりをして、その日はお寺に帰りました。

また次の日、午後一番のお宅におまいりに行くと、そちらのお宅もなかなか出て来てくださらない。奥に行って声をかけたらまたテレビの音が聞こえました。やっと出て来てくださったご夫婦と一緒におまいりをして、おまいりが終わってから、「一生懸命ご夫婦でテレビ見ておられましたけど何を見てたんですか?」と聞いたら、「みのもんたさん見てました」と仰るもので、「今日は何を食べたら長生きできるって言ってましたか?」と聞きましたら、「あら、若さんもこのテレビ見てるんですか?」と仰るので、「いやいや、前の日におまいりしたお宅のおばあちゃんに、みのもんたさんのテレビでは長生きできる食べ物を教えてくれるから毎日見てるんですって教えてもらったんですよ」とお答えしました。そうすると、そのご夫婦が「若さん、どうやらバナナを食べたら長生きできるらしいですよ。みのもんたさんがそう教えてくれました」と仰るんですね。私も「そうですか、じゃあ私もバナナを食べましょうかね」なんて言いまして、そのお宅を出て、また何軒かお参りをしてお寺に帰りました。

お寺に帰ると丁度母が夕飯を作っていました。

「良いところに帰ってきた。夕飯の買い物で、買い忘れがあるから、スーパーに行ってきてくれる?」と母が言うものですから、衣から洋服に着替えてスーパーに行きました。

田舎ですから、お寺の近くのスーパーは一軒しかありません。そこに私が行きますと、夕飯の買い物に来られている門徒さんに沢山お会いしました。しかし、どうも会う人会う人、みんな買い物カゴの中が黄色いんです。人の夕飯の買い物をあまりのぞき込むのも失礼ですから、そんなことはしませんが、会う方々のカゴの中にどれも黄色いものが入っているんですね。そして、またご門徒の奥さんに会いまして、声をかけられました。その奥さんのカゴの中にも黄色いものが見えるので、ついカゴの中をしっかりと見てしまいましたら、バナナが二房入っていたんです。これはもう言うしかないと思いまして「奥さん、みのもんたさんの番組見ましたか?」と聞いたら「見た見た見た!バナナを食べれば長生きできると言ってたね!」と仰いました。その後に会ったおばあちゃんも、やっぱりバナナを買っていました。スーパーでのその出来事を通して、みのもんたさんの力は絶大だなと感じました。

他力の信心

さてその時、私が何を考えたかというと、「信じる」ということについてなんです。

阿弥陀さまが必ずあなたを救うよと約束してくださっているわけですが、じゃあそれを信じて南無阿弥陀仏とお念仏できるかと言うと、「阿弥陀さまって本当にいるんだろうか?」とか「そんな約束、本当なんだろうか?」とか、やっぱり疑ってしまう。

それなのに、みのもんたさんがテレビで「バナナを食べたら長生きできますよ」と言うと、みんな信じてしまうんです。信じてるからバナナを買うんですよね。

でも、冷静に考えてみると、みのもんたさんと阿弥陀さま、どちらが尊い存在かと考えたら、もちろん阿弥陀さまが尊いわけですよね。もし、ここに阿弥陀さまの仏像と、みのもんたさんの銅像とがあったら、どちらに向かって手を合わせるかと考えると、そりゃあ阿弥陀さまに手を合わせて南無阿弥陀仏って言うでしょう。みのもんたさんの銅像に手を合わせて「みのもんた様、みのもんた様」と称える人はいないと思います。

阿弥陀さまのお約束は信じるのが難しいのに、みのもんたさんがヒジキやバナナを食べると長

生きできますよと言うとそれはすぐに信じてしまう。この違いは何なのでしょうか。

それは結局のところ、阿弥陀さまが救うと言っても、そりゃあ死んだ後の話でしょ？　死んだ後に、極楽浄土なんて世界があって、そこで救われるなんて言われても、そんなことよりも、今生きていることの方が大事だ。長生きの方が大切だ。こうなってしまっているんじゃないかと思うんです。

そこで、もう一度考えていただきたいのですが、阿弥陀さまの本願と呼ばれるそのお約束は、死んだ後のことを仰っているのか。そうではありません。

浄土真宗は、南無阿弥陀仏というお念仏一つで救われていくという言われ方もしますけれど、これは決して、何百回も毎日一生懸命に念仏を称えることで救われていくという意味ではないんですね。

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏というこのお念仏は、その一声一声が、阿弥陀さまから届けられている声なんだと教えてくださいました。阿弥陀さまがこの私に真実の心を届けてくださり、そして、その仏さまが届けてくださった心が、南無阿弥陀仏というはたらきとなって私たちの口から出てくださっているのだと示されています。南無阿弥陀仏というお念仏は、私の口から出る私の

声であっても、これは仏さまが「今」私に届けてくださっている心であり、声なのだと、このように親鸞聖人は教えてくださったわけです。

ですから、南無阿弥陀仏というお念仏は、沢山称えておけば死んだあとに極楽浄土という世界で救われるというような、そういう教えではないんですね。

今この私の人生には、色んな苦しみがあります。辛い別れがあります。そういう時に、南無阿弥陀仏と称える。その一声一声のお念仏を通して、阿弥陀さまは「あなたの苦しみを、私はわかっているよ」「誰がわかってくれなくても、私がわかってるよ」「私が一緒に苦しんでいるよ」「一緒に泣いてるよ」と仰ってくださいます。大切な人との別れがあっても、南無阿弥陀仏と称えるお念仏の中に、「お浄土という世界でまた必ず大切な人と会わせてあげるよ」と、このように仏さまが声をかけてくださっているわけです。

もちろん、これは苦しみ悲しみのときだけではありません。喜びのとき、嬉しいことがあったときでも、南無阿弥陀仏と称えるその一声のお念仏を通して、仏さまが一緒に喜んでくださるわけです。

浄土真宗は決して死んだ後の教えではありません。この人生の喜びも悲しみも一緒に歩んでく

ださる阿弥陀さまがおられるわけです。いつでもどこでも、お念仏を通して声をかけてくださる、心を届けてくださる阿弥陀さまというあたたかい仏さまがおられ、阿弥陀さまと一緒にこの人生の喜び悲しみを過ごし、そしてこの命を終えた後は、大切な方々が待っていてくださるお浄土へと向かって、命終えて往ける、生れて往ける、そういう人生があるということを、親鸞聖人はお念仏を通して教えてくださったのです。

南無阿弥陀仏の心

先程、阿弥陀さまの本願には「信じる」ということと「念仏」ということがポイントとして示されていると言いました。

その「信じる」というのは、決してこちらが一生懸命努力し続けて信じる心を深めていくということではありません。何か難しい仏教用語を覚えたり、お経を暗記したりして、ちょっとずつ信じる心が芽生えてくるとか、そういう「信じる」ではないのです。今、阿弥陀さまから届けられている心が、私を場として南無阿弥陀仏というはたらきとなってくださっているのだと、その

ようにお念仏を受け取る、頂戴する。そして、阿弥陀さまのお約束は、人生の苦しみに右往左往するこの私を救うためのお約束なのだと、そのように聞き受けていく、それが浄土真宗における「信じる」ということです。本当ならばここで「仏願の生起本末」というお話をしなければならないのですが、今日は「はじめの一歩」ですから、まずはとりあえず、浄土真宗の信心とは、こちらが努力して自分の力でつかみ取っていくという信心ではないということを知ってください。阿弥陀さまが届けてくださるお心をそのまま頂戴するわけです。このことは、二回生以上の方は「他力の信心」という言葉で「仏教の思想」の授業で習ったかと思いますし、一回生の皆さんはこれから習っていくことです。

このように、仏さまの心を頂戴することが浄土真宗の「信心」なのです。

最後にこれは、一昨年の三月にご門徒さんのお宅におまいりをしたときの話です。

私の実家は標高四百メートルの地域にありまして、結構寒いのです。しかし、私の実家がある北広島町という町には、標高八百メートルの地域もあり、そこは「広島県のエベレスト」と呼ばれています。その標高八百メートルの地域にお住まいの門徒さんのお宅におまいりした時の話で

すが、おまいりの後、そこのおばあちゃんと二人でお話ししていたんです。そうすると、そのおばあちゃんが「若さん、ちょっと待っててくださいね！　良いものを見せてあげますから」と言って、短い布のようなものを持って来られました。おばあちゃんが「これ見てください！」って凄く嬉しそうにそれをコタツの上に置かれたんです。でも、私はそれが何かわからなかったんですね。すぐに「ああ、これはあれですね！」って答えられたら、おばあちゃんも喜んでくださるだろうとは思ったんですけど、「何だろうかこれは…。毛糸で出来ているようだけれど…。」と思うばかりで、それが何かわかりませんでした。

どうしてもわからないので「これなんですか？」と聞いたんです。そうするとおばあちゃんが、「これは孫に編んでもらったマフラーなんですよ」と教えてくれました。

そこでやっと、それがマフラーであることがわかりました。しかし、マフラーにするとかなり短いので、おばあちゃんに「マフラーにしては、これはちょっと短くないですか？」と聞くと、おばあちゃんが「ちょっと待ってくださいね」と言って、そのマフラーをご自分の首に実際に巻いて見せてくれたんですね。かなり短いマフラーですから、すごく引っ張りながらギューっという感じで巻いて、やっとギリギリ首を一周して、外れないように首の前で手で押さえておられま

した。そうやって、マフラーを手で押さえながらおばあちゃんが「ほら見てください。立派なマフラーよ、ちゃんと首に巻けたんですから」と笑いながら仰るんですね。そこで私も「確かに、立派なマフラーですね！」と答えました。

そしたら、そのおばあちゃんが、「今年の冬は、老人会に行くときも、地域の集まりのときも、どこに行くときも、ずっとこのマフラーを首に巻いて過ごしたんですよ。今年の冬は、このマフラーのおかげで温かく過ごせました」と仰ったんですね。

その言葉が非常に印象的でした。標高八百メートルの地域ですから、首に短いマフラーを一周巻いただけで冬の間ずっと温かかったのかというと、物理的にはそうじゃないわけですよね。本当は、首に何周も巻けるマフラーの方が温かいでしょう。しかし、おばあちゃんは「このマフラーのおかげで今年の冬はずっと温かかった」とこう仰るんですね。

その言葉を聞いて、ああ、おばあちゃんにとっては、マフラーの出来が良いとか悪いとか、長いとか短いとか、そういうことは問題ではないのだなと思いました。自分のために、孫が一生懸命マフラーを編んでくれたという、その気持ちが嬉しいんですね。大切な大好きな孫が自分のために編んでくれた、そのマフラーを巻けば、お孫さんの温かい心がおばあちゃんに届いていくわ

けですよね。それを受け取っておばあちゃんは、温かいなあ、嬉しいなあと、そう思いながら冬を過ごされたんだと思います。それが、「今年の冬はこのマフラーのおかげで、ずっと温かかったです」という言葉になっているんだなあと味わわせていただきました。

私たちはお金や物を貰うともちろん嬉しいわけですが、やはり本当にいただいて嬉しいのは「あなたのことを大切に想っていますよ」という心です。あなたのことが大切ですよという心をいただくことは最高に幸せなことです。

今日は、「浄土真宗はじめの一歩」という題名でお話させていただきましたけれど、この浄土真宗、お念仏の教えというのは、阿弥陀さまがこの私に、「あなたのことが大切だよ」「あなたの喜びはわたしの喜びだよ」「あなたの苦しみは私の苦しみだよ」と、この人生の喜びにも苦しみにも、南無阿弥陀仏というお念仏を通してあたたかい心と声を届け続けてくださっているという、そういう教えなのです。

一回生の方は今日はじめて浄土真宗の話を聞いたという方がおられるかもしれません。今日のご縁を通して、阿弥陀さまという仏さまから、南無阿弥陀仏というお念仏を通して、仏さまの心

を頂くのが浄土真宗であるということを少し知っていただければ幸いです。私を見ていてくださる仏さま、一緒に歩んでくださる仏さまがおられます。それが阿弥陀さまです。

それでは、時間がまいりましたので、最後に「御文章」を拝読させていただきます。

〔御文章拝読〕

（文責在宗教部）

（二〇一九年五月二十一日　創立記念・降誕会法要）

ものみな金色（こんじき）に輝く

徳永一道
（本願寺派勧学寮頭・京都女子大学名誉教授）

徳永道雄（とくなが みちお）
法名 **徳永一道**（とくなが いちどう）

浄土真宗本願寺派勧学　京都女子大学名誉教授
1941年 大阪生まれ。
'65年　大阪外国語大学英語学科卒業。
'72年　龍谷大学大学院文学研究科博士課程真宗学専攻満期退学。
　　龍谷大学仏典翻訳部主事を経て、
'74年　本願寺国際センター英文浄土真宗聖典翻訳研究員。
'82年　京都女子大学講師，助教授を経て、'91年 教授。
'85年　ハーバード大学世界宗教研究センター客員研究員。
'87年　ハーバード大学神学部沼田講座教授。
'01年　学階「勧学」を授与さる。
'07年　京都女子大学を定年退職。
現在，　標記のほか本願寺派宗学院講師，本願寺国際センター英文
　　真宗聖典翻訳委員会委員長などを務める。
　　本願寺派正福寺（大阪府八尾市）住職。

【著作】

Shin Buddhism Translation Series（英文真宗聖典シリーズ）
（共訳／本願寺国際センター '78～'09年）
『現代思想と歎異抄』（訳／Alfred Bloom原著／毎日新聞社 '87年）
『神学の方法をめぐるエッセー・神と「空」』
（訳・解説／Gordon・D・Kaufman原著／ヨルダン社 '94年）
『大乗仏典〈中国・日本編〉21、法然・一遍』（中央公論社 '95年）
『正像末和讃』（安居講本，'96年）
『浄土文類聚鈔講讃』（安居講本，'03年／永田文昌堂 '04年）
『観無量寿経を読む』（本願寺出版社 '09年）
『親鸞聖人ーその教えと生涯に学ぶー』（共著／本願寺出版社 '10年）
ほか論文記事など多数。

ただいま紹介していただいた徳永と申します。この講堂で話をさせていただくのは二度目で、前回は今から十年ほど前でした。非常に緊張したことを覚えております。今日もかなり緊張しております。ところが、今この法要に参列していますと、讃歌から何から全て、京都女子大学で行ってきた法要とそっくり同じ内容でしたので、かなり気持ちがほぐれました。また、非常に懐かしく思いました。

私が私の人生で一番大事だと思っている経験は、京都女子大学での三十三年間の教育者としての経験です。定年退職してからもう十年以上になります。

京都女子大学は龍谷大学の姉妹校ですが、龍谷大学と違って、寺院出身の学生はほとんどいません。百人に一人もいない。従いまして、入学した時は「仏とも法ともわからない」状態です。学生たちは合掌の仕方も知りません。最初のうちは実にやりにくいわけです。

そういう学生たちを相手に、釈尊の教え、そして親鸞聖人の教えを伝えなければいけない。これは至難の業であります。おかげで私は仏教を大所高所から、上から目線で伝えるという姿勢を脱却できたと思います。

もう一つの大事な経験は、アメリカでの経験です。私はよくアメリカへ行きます。ハーバード大学へは、五、六回、行きました。そこで学生たちに親鸞聖人の教えを伝えました。これもずいぶん難しいことでした。

なぜなら、言葉が無いからです。言葉が無いというのは、「日本語がそのまま英語になるとは限らない」という意味です。ぴったりの言葉は、ほとんど無いと言ってもいい。そういう無い言葉は作って、彼らを説得しなければなりません。

皆さんは、「言葉が無い」などと言うと、「日本語から英語に置き換えればいい」「辞書を見ればいい」と仰るでしょうけれども、それは適切な言葉ではないのです。「さようなら」という英語はありません。皆さん、「さようならぐらい知っていますよ」と仰りたいような顔をしていますね。「Good bye でしょう」と。「Good bye」は「さようなら」ではありません。あれは「神さまと一緒に行きなさい」という意味です。日本語の「さようなら」とは全然違います。

「ありがとう」という英語はありません。「Thank you」じゃありませんよ。「Thank you」は「私はあなたに感謝します」という意味ですね。「ありがとう」は、「あなたが私にしてくださったご親切は有り難い、滅多にないほどのものだ」と。だから感謝の意味になるわけです。

言葉の背景を探っていくと、ぴったりくる言葉は一つもないということです。

「ミカン」という言葉さえありません。なぜなら、アメリカに「ミカン」が無いからです。日本人が「ミカン」と言う時は、いわゆる温州ミカンのことですが、アメリカには、そのミカンはありません。「ミカン」は「Orange」ではありません。簡単な言葉でも全然違います。

言葉が違うということは、ものの考え方が全然違うということです。そういう人たちに仏教の教えを伝えることは至難の技です。

私が行ったのは、ハーバード大学の神学部です。神学部の学生たちは、キリスト教神学を専門にしています。同じ宗教を説くのだから通じるかというと通じないのです。全然違います。要するに、日本の仏教は向こうの宗教の範疇に入らない、ということです。

そういう話をしているときりがないので、話をもとに戻します。要するに京都女子大学で、まるで仏教が通じない学生たちを相手に私は三十三年間、釈尊の教えと親鸞聖人の教えを伝えてきました。これはたいへん貴重な経験でありましたが、ずいぶん難しいことでした。

私は今、本願寺の勧学寮というところにおります。同時に、勧学寮が経営している宗学院とい

う、まさに浄土真宗教学の最も専門的な知識を教える機関があります。そこで講義を担当しています。

皆さんがその宗学院の講義においでになったら、おそらくほとんど解らないでしょうね。「この人たち火星人か、火星語をしゃべっているのか」と思われても仕方がないような言葉を使って、宗学を議論し合うという、そういうことを私はやむを得ずやっています。けれども実際は、京都女子大学の学生たちを相手に教えたような、そういう対象に、仏教の教え、親鸞聖人の教えを伝えたい。それが本音であります。

本願寺国際センターという機関が西洞院花屋町にあります。

本願寺は海外開教区というのを持っていて、海外開教区の人たちを相手に教えを伝えなければいけない。それは日本語ではできませんので、外国語に訳すための機関があるわけです。

先ほど入澤（崇）学長が、龍谷大学大宮の仏典翻訳部のことを仰っていました。私はそこ入澤学長と知り合ったわけです。龍谷大学仏典翻訳部と本願寺国際センターは違う組織ですけれども、

仏教の教典を英語に翻訳するという、その仕事は同じです。

私は、国際センターで親鸞聖人の著作を英語に翻訳する仕事に創立当時から五十年以上関係しています。仏典にはサンスクリットの言葉がよく出てきますが、サンスクリット語で英語になっているものは少しあります。それは使えます。例えば「saṃsāra：サンサーラ・輪廻」とか「nirvāṇa：ニルヴァーナ・涅槃」は英語になってしまっていますから、それは使っても安心です。他は、ほとんど英語が無いので言葉を対応させるしかありません。

一番困るのは、日本語の仏教の言葉で、英語には無い言葉が次から次へと出てくることです。そして、それ以前に、発想の仕方が異なる点が一番の問題なのです。

「向こうに山が見える」という日本語は絶対に英語にはなりません。「そんなの簡単だ。I see the mountain over there でしょう」と言われるかもしれませんが、それは違います。「私は向こうの山を見ている」という意味ではありません。

「向こうに山が見える」の主語は何ですか。「I see the mountain」では、I（私）が主語ですが、「向こうに山が見える」の主語は、私ですか。違いますね。山です。「山が、見える」のです。

「私が山を見ている」とは全然違う。方向が逆なのです。従って正確には訳していない。「向こうに山が見える」という日本語は英語に訳せないのです。「小鳥の声が聞こえる」も同じことです。「小鳥の声」が主語であって、「私の耳に入ってきている」ということです。

皆さんは「向こうに山が見える」「小鳥の声が聞こえる」という日本語には他力的な発想がみられるということに気がつきましたか。特に真宗学や仏教学を専攻の方は、これに気がつかないといけませんね。

「向こうに山が見える」は、山が主語であって、私の目に飛び込んできているという情景です。「小鳥の声が聞こえる」は、小鳥の声があって、それが私の耳に飛び込んできている。主語は「私」ではありません。ところが英語では、「私は、向こうの山を見ている」「私は、小鳥の声を聞いている」というふうにしか訳せない。

発想がまったく違うということは、世界観が違うということです。この二つを比較して、その違いを伝えることは至難の技でありますが、それを伝えなければ、伝えたことにはならない。

私がアメリカに行って、向こうの学生たちに伝える時には「I see the mountain という英語は、日本語ではIを使わずに言うんだ」と言います。「そんなことができるのか」と彼らは言います

が、言わなければしようがないですね。「向こうに山が見える」「小鳥の声が聞こえる」というのは、どこにも「私（I）」はない。それを説明しなければなりません。

そういうところから、発想が違う。我々はすでに他力的な発想になっている、という話から始めていく。それが私のやり方であります。

今の話は、ほんの出だしの部分です。本当に申しあげたいのはタイトルにある「ものみな金色（こんじき）に輝く」ということです。この発想もまた、西洋にはない発想であることを申しあげたいと思って、このテーマを用意しました。

「ものみな金色に輝く」とは、「この世界に存在するものは全て金色に輝くほど尊い」「無駄なものは一つもない」そういう意味です。

皆さんの中でもご存じの方もおられるでしょうが、親鸞聖人が究極的なよりどころにされた経典である『無量寿経』には四十八願（しじゅうはちがん）があります。『大無量寿経』とも言います。『大経』と省略することもあります。この『無量寿経』の教えによって、浄土真宗の親鸞聖人の思想は成り立っているのです。

その『大経』に阿弥陀さまの、阿弥陀仏の本願というのが説かれている。

『大経』にはいろいろな訳がありまして内容も違います。通常我々は魏の時代の「魏訳」を一番拠り所にする翻訳（所依）として用いています。それには四十八の本願が説かれています。訳によっては二十四願とか、数が違います。

その四十八の願には、阿弥陀さまの願いが説かれている。阿弥陀仏と言うと特殊な響きを持ちますが、阿弥陀さまの願いというのは、「宇宙の願い」と言い換えてもいいぐらいの願いであります。我々、一人ひとりの衆生にかけられた願いが説かれています。我々は、そういう願いの中に住んでいる。そう言い換えてもいいわけです。

その四十八願の十八番目が、浄土真宗の教学の一番の中心になっています。第十八願と言えば、泣く子も黙るぐらいの大きな力と意味を持っているわけですが、今日皆さんにご紹介したいのは、第三願、あるいは第四願です。普段、教学ではまったく問題にしない、無視するような本願です。仏教の専門家、浄土真宗の教学の専門家が問題にするような本願とは違って、私が京都女子大学で学生たちに対して一番問題にしたのは、今、言った願です。一般に通じるような、そういう本願です。

そこに「悉皆金色の願」という本願があります。「悉皆」とは、「悉く皆」。そして「金色」の願。「悉皆金色」とは、「ものみな金色に輝く」ということです。

阿弥陀さまのお慈悲の中にあるものは、すべて金色に輝くほど尊い。無駄なものは一つもない。金色に輝くというのは、尊いことを表しています。それぐらい尊いものである。そういうことを願った願であると言える。宇宙的な願いということから言えば、我々がこの世界に住んでいるということは悉皆金色の願の中に住んでいると、こう置き換えても間違いないと思います。阿弥陀さまを信じる人だけにわかるとか、そういうことではありません。もっと広い意味で捉えなければ、阿弥陀仏の本願というのは意味がなくなってしまいます。この世界に存在するものは一つとして金色に輝かないものはない。すべてが尊いということなのです。

これを時間に置き換えますと、我々の人生、生まれてから死ぬまで、一瞬も金色に輝かない時はない。全ての瞬間が、金色に輝くほど、かけがえのない瞬間なのです。横に広がりますと、この世界に存在するもので、金色に輝かないものはない。

私はアメリカでよくこういう冗談を言います。「ゴキブリも金色に輝いている」。皆、どっと

笑います。それを私は待っているわけです。「ごきぶりホイホイ」を仕掛けて殺しても、叩き潰しても、なんとも心は痛まない。そのゴキブリが金色に輝いているとお聞きになったら、どうですか。

しかし「悉皆金色の願」に照らせば、ゴキブリも金色に輝いているし、ぺんぺん草も金色に輝いている。そういう価値観なのです。我々日本人を含む東洋人は、そういう価値観のもとに世界を捉えてきました。

鈴木大拙先生が最もよく使われ大事にされた「よく見れば　なずな花咲く垣根かな」という芭蕉の句があります。「なずな」はぺんぺん草です。雑草中の雑草で、踏みつぶしても引き抜いても、なんともない。そのぺんぺん草が咲いている。芭蕉はこのぺんぺん草をどう捉えているか。芭蕉はこれを踏みつぶしたか、あるいは引き抜いて捨てたか。そんなことは考えられませんね。芭蕉は、野の片隅に咲いた、あるいは垣根の下に咲いたぺんぺん草を見て、「ああ、ここに生命(いのち)が咲いている」と思ったに違いない。鈴木大拙先生は、そういう解説を付けておられます。

私は、誠にその通りだと思います。我々はぺんぺん草を引き抜いたり踏みつぶしたりしても、なんとも心は痛まないけれども、そこには生命があるのです。それに芭蕉は気がついて、我々に

伝えてくれているのです。

そのような価値観を仏教は教えている、ということになると、阿弥陀さまの本願の第三願である「悉皆金色の願」、この世界に存在するものは、金色に輝かないものは一つもない。全て金色に輝いているという願の意味するところは非常に大きなものになります。

これを自分の人生に置き換えたら、これから先の人生で、無駄な時は一瞬もないということになります。失敗して絶望のどん底にある時も、あるいは有頂天になっている時も、どんな時でも、その人生は金色に輝くほど尊いものである。こういうことを教えてくれていることになります。

浄土真宗の教学として、たいへん難しい第十八願とか第二十願とかを宗学院で扱うのが私の仕事ですけれども、それよりももっと普通の、当たり前のことを、この本願が教えてくれているということです。

本願の四番目には、「無有好醜（むうこうしゅう）の願」という願があります。「無有」は「有ることが無い」、つまり「無い」ということです。「好醜」は美醜のことです。「美しい、醜いというようなことはない」。この世界に存在するものについて我々は、美しいとか醜いとか、役に立つとか立たない

とか、損だとか得だとか、そういう価値判断ばかりつけてモノサシをあてて選り好みをして生きている。しかし、この世に存在するもので、美しいとか醜いとかいうものは無いというのです。それはそうですね。悉皆金色、皆、金色に輝いているわけだから、好醜があるわけがない。

第三、第四の、この二つの本願は、専門の教学の上では問題にしません。問題にしているのは、私ぐらいのものだと思います。皆、こんなのどうでもいいと思うのでしょう。でも私はこれをもって、仏教をまったく知らないアメリカ人に伝えることをモットーにしてきたわけです。

「ゴキブリも金色に輝いている」と言うと、アメリカの人はみんな、どっと笑います。日本でもそうです。私はそれを百も承知で何度も繰り返します。「ゴキブリも金色に輝いている」「ゴキブリも金色に輝いている」…。そうすると、最後にはシーンとなります。そういうものの見方、世界観を知ってもらいたいというつもりでお話をしているわけです。

皆さんにお話ししている今日も、同じであります。ゴキブリも金色に輝くという言い方の、奥に隠されている真理、それに気付いていただきたい。ものみな金色に輝くも、同じことです。全てのものが、石ころでさえ、金色に輝いている。

芭蕉は、ぺんぺん草を見て、ここに生命があると気がついたのです。「よく見れば　なずな花

咲く　垣根かな」。これだけで終わりです。べらべら喋ってはいません。生命というものに心打たれて、芭蕉は沈黙せざるを得なかった。そういう情景を歌っているということですね。

ところで私は、京都女子大学の卒業生から手紙をもらうことが多く、それを大切に持っています。段ボールにいっぱいたまっています。その中に、ルンルン気分で書いてきたものは一つもありません。楽しい時は手紙なんか書かない。困った時に私に訴えてきているわけです。彼女たちは卒業してから実に様々な人生の苦を経験している。それを綴った手紙を寄こすわけです。

その一つに、このような手紙がありました。彼女は卒業して大阪の会社に就職しました。

皆さんはご存じないでしょうけれども、その頃は「三高（さんこう）」という言葉が流行りました。背が高い、収入が高い、学歴が高い。こういう男性を射止めるのが女性の幸せだという、実に浅薄な考え方ですけれども、週刊誌あたりが流行させたのでしょうね。

彼女は卒業し就職してから、まさにその三高の男性を射止めて結婚しました。幸せの絶頂です。二人仲良く暮らしていて、そのうちに愛の結晶が産まれることになったそうです。

ところが、赤ちゃんが産まれた途端に、どん底に落ちたそうです。事情を説明しなくてもお分かりになると思いますけれども。

日本の場合は特に、結婚したら二人だけの問題で済まないことがあります。背後にいる連中がうるさい。ごちゃごちゃ言い始める。彼女の耳に入ってくるのは、ご主人の方の親類がごちゃごちゃ言う声です。同じことがご主人の方にも、彼女の身内から伝えられていく。そういうことで、あれほど愛し合っていた二人の仲にまでヒビが入ってしまった。そして、その赤ちゃんを抱えているので、もうどうにもならない、にっちもさっちも行かなくなったということですね。

いろいろな所へ行ったそうです。お医者さんに行っても治らないような病気です。そういう状況に陥って「この人生はもう終わりだ」と、彼女はそこまで思い詰めてしまったわけです。それで最後に、遺品となるものを整理していたのだといいます。

私が卒業する前の学生たちに、「ノートいっぱい使って書いておけ」と言う言葉があります。「これは僕の、君たちに贈る最後の言葉だ。だから、ノートいっぱいに書いておけ。一行なんてけちなことは言うな。一ページ使って書いておけ」と言って、黒板に「ものみな金色に輝く」と

書きます。今日、私がタイトルにした言葉です。

彼女は、最後に身辺の物を整理していて、そのノートを見つけたというわけです。

「ものみな金色に輝く」。これはいったいどういう意味だっただろうと考えたら、人生の一瞬一瞬が、金色に輝くほど、かけがえがない、尊いものである、と。この世に存在するもので、金色に輝かないものは一つもない。あらゆるものが金色に輝いている。私の人生の一瞬一瞬も、金色に輝いている。私が道連れにして死のうとしている、この我が子も金色に輝くほど尊い存在である、ということに気がついた、というような手紙でした。

私はその手紙を今も宝物のように大事にしています。今日、私が申し上げたいことは、こういうことなのです。

皆さん方のこれからの人生も、一瞬一瞬は金色に輝くほど尊い、かけがえのないものであるということです。我々人間の目から見たら、そうは見えないかも知れないけれども、そのように見てくださるものがあるんだよ、ということです。

今日は、皆さん方への贈り物として「ものみな金色（こんじき）に輝く」という言葉を贈りたいのです。私

の人生、皆さん方のこれからの人生の一瞬一瞬は、金色に輝くほど尊い。何ものにも代え難いほど尊い。そういうものである。そういうものの見方、世界観、価値基準がある。

これは人間には持てません。けれども、親鸞聖人が一番心の拠り所となさった阿弥陀さまの本願、阿弥陀さまの大悲は、そのようにして我々を包んでくださっています。

「ものみな金色に輝く」「悉皆金色の願」です。この世界に存在するもので、金色に輝かないものは一つもない。従って、私の人生の一瞬一瞬も金色に輝くほど尊いものであるという価値観に、今日ここで気がついていただいたら、私は本望です。

時間がきたようですので、これで終わりましょう。ご静聴ありがとうございました。

（文責在宗教部）

（二〇二〇年十一月九日　顕真館公開講演会）

「仏教を理念とする社会実践」～自死・気候危機への対応

竹本了悟
（京都自死・自殺相談センター代表、TERA Energy 代表取締役）

竹本了悟（たけもと りょうご）

西照寺住職。
防衛大学校卒業後、海上自衛隊に入隊するが僧侶となるため退官。龍谷大学大学院で救済論について研究。浄土真宗本願寺派総合研究所研究員として宗教者の社会貢献をテーマに実践的に研究し、2010年に京都自死・自殺相談センターを設立、代表をつとめている。2018年、研究所を退職、４人の僧侶でTERA Energy株式会社を起業、代表取締役に就任。

先程、ご紹介に預かりました、竹本と申します。

今日は、まず自己紹介として、なぜ私が仏教に関心を持つようになり、自死のこと、環境問題のことに関わるようになり、TERA Energy 株式会社という電力の小売り会社を起業するに至ったのかについてお話しさせていただきたいと思います。

また、全体を通して、仏教という教えが私達が生きる上での大切な軸になり得るということ、死にたいという気持ちをもっている方、大切な人を自死でなくした自死遺族、そういう方にとっても仏教の考え方や、あり方が、大きな支えになるということについてお話しさせていただきます。

自己紹介

奈良県西照寺の住職

生きる意味を「身近な人を護ること」に求め、防衛大学校を卒業後、海上自衛隊に入隊するが、道に迷い退官。

改めて、生きる意味を求め、龍谷大学大学院で救済論（救いとは何か、どうすれば救われるか）をテーマに研究。その際に浄土真宗本願寺派の僧侶となる。

お寺の住職、ＮＰＯ代表、電力会社社長、どこがどう繋がるんですか？　と良く聞かれます。実は私は、割と行き当たりばったりに生きてきた人間です。ただ、目の前のことに一生懸命に取り組みつつ、来た話しや、色々なご縁にあい、その場その場で「大切だなあ」とか、「凄く気持ちが動くなあ」ということに飛びついているうちに、お寺にも入り、ＮＰＯも立ち上げ、社長にもなったのだと思っています。

イジメ、海上自衛隊から、龍谷大学へ

そんな私ですが、「一番のスタート地点って何だろうか？」と考えた時に思い当たったのは、小学生の時にイジメられていたということです。その時、毎日のように「自分は何のために生きるのだろうか」と思っていました。それが常に自分の根っこにあると思っています。孤独の中で

そんなことを考えていた時期は結構長く、中学2年生くらいまでは悶々と考えていました。

そして、自分なりに一つの答えとして出したのが、「そうだ、自分は身近な人を護るということをやっていきたい」、ということです。自分自身の自己実現のための夢とかではなく、「身近な人を護る」ということが自分の生きる意味になり得るんじゃないかと思ったのです。

私の地元は広島の能美島です。近くに自衛隊の幹部候補生学校がありました。学生方は白い制服でバリっとした人たちで、私の母親とか、親戚のおばちゃんとかも、その制服姿を見て、「かっこいい」と言っていました。すごく良いイメージがありました。そういうことも影響していたのでしょう。防衛大学校進学し海上自衛官になろうと思ったのです。卒業後は海上自衛隊に入隊しました。

ところが、実際に入ってみると現実が見えてきました。たとえば、家庭内でトラブルがあったときも、海上自衛官は一度出港してしまうと何ヶ月も家庭から不在になり、家族を放ったらかしにしないといけません。連絡もとれなくなります。

そういうことに、「ちょっとまてよ」と思ったのです。自分の生きる道として自衛官はピッタリだと思っていたけれど、ちょっと違うのではないか？　と、もう一回、「人生の生きる意味」っ

て何かを考え直そうと思いました。そして、母親の勧めもあって、龍谷大学の大学院で真宗学・仏教を勉強することになったのです。

研究テーマは、「救いとは何か」とか、「どうすれば救われるか」とか、「生きる意味って何か」っということ。つまり、救済論をテーマに研究をしました。

京都学派と出あいから僧侶の道へ

しかし、実は私は仏教が人の人生の役に立っているとは思っていませんでした。ですから、むしろ仏教よりも哲学に関心を持って過ごしていました。ところが、ある哲学の先生の勧めがあって、京都学派の田邊元（たなべはじめ）という方が書いた『懺悔道としての哲学』という本を読んで衝撃を受けました。

それまでの私は、日本や東アジア文化圏の思想より、西洋哲学の方が凄いという思い込みを持っていました。しかし、京都学派の哲学者たちは、西洋哲学と東アジア思想――それこそ仏教とか、そういったものの素晴らしさ、凄さ――を西洋哲学とすり合わせ、さらにそこから西洋哲学を越

えて行こうとするわけです。そういう営みを知って衝撃を受け、そこから逆輸入的に、仏教・浄土真宗の凄さ、素晴らしさに気付かされたのです。

大学院の間、その本ばかり読んでいましたが、そこに一つの答えとして表現されている救済論、この魅力に頷かされて私は僧侶に成っていったということです。

自死問題との出あい

大学院を出た後、浄土真宗本願寺派総合研究所の研究職になりました。その時、私は「仏教の素晴らしさを色んな人に伝えていきたい」という思いが強かったのですが、私が所属したチームは、現代社会の課題に対して、教団とか僧侶とかがどのようにアプローチできるだろうか、ということを研究しているチームだったのです。

その当時、二〇〇七年のことですが、その年は一〇年連続で年間三万人を超える自死者が出たということがメディアを賑わせていた時期です。そういうこともあり、私が所属していたチームでも自死をテーマにしようという話が出て、私も関わるようになりました。

ところが、私は最初、「自死をテーマにする」ということがすごく嫌でした。本能的に拒絶していたようにも思います。自死ということを「研究テーマにする」ということが、私としては凄く不遜なことに思えたのです。人が真剣に悩んでいる、死にたいという思いを持っている、それを「研究する」というアプローチに前向きになれなかったのです。反対したことを今でも覚えています。とはいえ、当時一番下端でしたので、巻き込まれるような形で自死についての研究に関わるようになりました。

そういうわけで、最初はかなり後ろ向きで、先輩にただついていくような関わり方でした。しかし、そのような自死に対する自分のスタンスが大きく変えられた経験がありました。

京都にある「こころのカフェきょうと」というところの代表しておられる石倉紘子（いしくらひろこ）さんのお話を聞いた時のことです。研究チームで石倉さんをお招きして、「自死遺族の方々のリアルな思いや考え方を聞いてみよう」ということになり、私たち十数人でお話を聞かせていただきました。

彼女は旦那様を自死で亡くしておられます。当然、亡くしたこと自体の苦しみや悩みもあり、さらに、その後親戚などからも本当に酷い目にあわされた方です。そんな中で、ご自身も自殺未遂をしたりされた。そのような経験を聞かせてもらったんです。衝撃的な内容でした。その話を

聞いた後、スタッフが順番に感想をお話しさせていただこうということになりました。

自分の番が回ってきた時、口を開けた瞬間に、自分でも本当に驚いたんですが、涙がボロボロ出てきちゃったんです。もちろん泣くつもりなんか全くなかったんですが、本当にびっくりするぐらい涙が出ちゃいました。

その時に、僕自身が何を感じて涙が出たのかと言うと、彼女のことが可哀想だとか大変だとか、自死でこんなことになるなんて、とかそういうことに涙が出たのではなかったんです。本当に不思議なんですけれども、小学校の時に私自身がイジメられた、すごく苦しかった、死にたくなった、その時の思いが「ウワー！」っとリアルに出てきて涙が出てしまったんです。

その時に初めて、自死を研究する事は自分にとって根っこに関わる重要なテーマなのだという事を実感しました。そこから、自死研究に本気で取り組むようになったように思います。

京都自死自殺相談センターの立ち上げ

そんな出あいもあり、龍谷大学の野呂靖先生なんかとも一緒になって、京都自死・自殺相談セ

ンターを設立しました。開設メンバーは一〇名で、その内五人が僧侶、それ以外は仏教にはそんなに関心がない方です。今年で設立から一〇年目を迎えます。

立ち上げ前には、私と野呂先生が一緒に、「大阪自殺防止センター」というところで一年半くらいそこの活動に関わり、学ばせていただきました。

「大阪自殺防止センター」の起源はイギリスのサマリタンズという、キリスト教をベースにした活動です。死にたい気持ちを持った人に電話相談を提供しています。こんなにまで、死にたい気持ちを持った人のそばに居ようとして、その気持ちをどこまでも分かろうとする団体は他にはないなと思うぐらい、本当に素晴らしい活動です。

しかし、「凄いな」と思う一方で、「ちょっと理解できないな」というところもありました。キリスト教がベースだからでしょうか、権利・自己決定権というか、全ての人に、何事においても自らが決定する権利がある、というところが何かシックリとこなかったのです。

相談者の方との表面上の関わり方、対人支援現場のやり方、トレーニングの仕方、どれも素晴らしいと思うのですが、一番根っこにある考え方について、私にはどこか受け入れられないところがありました。そんな思いもあり、死にたい気持ちって一体どういうものなのかとか、その死

にたい気持ちがどんな風になると、その人は救われるのかとか、そういうことも自分たちでゼロから積み上げてやってみようと思うようになりました。

やっぱりゼロから考えていきますので、トライ&エラーで色々なことをやりました。二泊三日の合宿で、実際にロールプレイのトレーニング方法なんかをお互いに研究したりとか、毎日のように終電までみんなで頭を悩ませて、これが良いんじゃないか、あれが良いんじゃないかと、何度も何度も色々なことをやりました。今考えると、やって良かったと思います。

キリスト教が悪いというわけではなく、自分たちの信仰や文化、そういう根っこが違っていると、やっぱりズレを感じたりしてしまうということです。それこそ、活動の中では目の前の人、自分が関わった人が、自ら命を絶つかもしれません。そんなことが起きた時に、根っこのところが自分の中で腑に落ちていなかったら、やっぱり自分たちも悩むし苦しくなるでしょう。そういう意味で、一番根っこのところ、自分達が持ってる「これが本当に人が支えられるって事なんだ」ということが、浄土真宗の信仰の上でもシックリとくる形で作れたのは本当に良かったと思っています。

京都自死自殺相談センターの活動内容

相談センターでは、具体的には「自死の苦悩を抱える時の心の居場所作り」をしています。ちょっと文章でややこしく書いてしまいましたが、読ませて頂きます。

「私たちは、自死の苦悩の根底には絶望的な孤独があると考えています。

その孤独が突きつけられ強くその孤独を感じた時に、人は死にたいと思わざるを得ないのです。一方たとえ「死にたい」と思ったとしても誰かの温もりを強く実感することができれば、その孤独感は幾分か和らぎます。人は他者との温かなつながりを感じることで、絶望的な孤独からしばし解放され得るのです。

そこで私たちは、たとえ絶望的な孤独を突きつけられたとしても、その孤独が少しでも和らぐように自死の苦悩を抱える方の心の居場所づくりをしています。また、一つの価値で覆い尽くされた世界は、その価値に合わない誰かを孤独に追いやります。だからこそ、自死の苦悩を抱える方の心の居場所を、この世界の多様性を彩る一つとすることで、多様な価値が

それぞれに尊重される社会を目指します」

死にたいぐらいになっている時、もう心は本当にボロボロです。それこそ、大怪我で立ち上がれないくらいの心の状態になっています。

そんな時、私達はあまり強引に近すぎる距離「大丈夫！」といったような、おんぶに抱っこでの関わり方はしません。また、「遠くから見守ってあげましょう」とか、そういう関わり方もしません。丁度良い距離感で、その人自身が居心地良く、今、そばに居てくれている、心配して見守ってくれている、そんな感覚が持てるぐらいの距離感で居たいと思っています。そういうことで、「そっとそばに居る」ということから、愛称をSOTTO（そっと）としました。

具体的には、電話相談とかメール相談、それから居場所作りということで、死にたいほどの苦悩を抱えた方、死にたい気持ちを持った方に対して、「おでんの会」とか「ゴロゴロシネマ」なんていう会を開催しています。おでんを食べたり、リラックスできるように簡単な体を動かす事をやったりとか、「死にたくなった時みんなどうしてる?」とか、そういうテーマで語り合ったり。死にたいぐらいの時に人と喋るのがそもそもしんどいとか、人前で食事するのが苦手という方も

結構いますので、積極的な行動をしなくても、一緒に映画を見るというだけで居心地よく居れるといったことを目的にゴロゴロシネマという会を開催したりしています。

それから、自死遺族の方に向けて、同じような経験を持った人と喋れる場を提供したりしています。今は、コロナの影響もありオンラインで自分の思いを語れる場を提供したりしています。

シンポジウムや講演会で、自死とはそもそもどういうことなのか、という話をさせていただいたりしています。

死にたい気持ちとは何か

では、ここからは「自死」そのものについて、イメージを共有させていただきたいと思います。

今の心の状態というのは人それぞれだと思いますが、たとえば、ニコニコできているような心の状態の時ってどんな時でしょうか。思わず笑顔になれるとか、鼻歌なんかが出ちゃう時って、おそらく自分の周りに凄く良い関係が沢山ある時なんじゃないでしょうか。人間関係、仕事、体調、お金、そういったことに自分が納得できていたり、居心地が良いような関係が沢山あったり

すると自然と笑顔でいることができます。

ところが、もし今、タンスの上の物が頭にゴツンと落ちてきたら凄く嫌な気持ちなりますよね。笑顔でいたはずが一つ嫌なことが起こると笑顔ではいれなくなります。

でも、痛みが引いてしばらくすれば、やっぱり元の状態に戻ります。

ところが、大きな病気に罹ったとか、大切な人を亡くしたとか、金銭的なトラブルに遭ったとか、人間関係がすごく悪いとか、そんなことが増えてきたらどうでしょうか。そんな時は周りを見ても凄くしんどい。そういったような状況になると笑顔なんか出てこなくなります。

そして、こういう状態が続くと、「何でこんな苦しい思いをしてまでこの世界にいなきゃいけないんだ?」っていう感覚になってしまう。これは、皆さんも何となくわかると思います。

この状態がさらに続くと、「自分なんて誰からも必要とされてないんじゃないか」「存在意義がないんじゃないか」「むしろ居ない方が良いんじゃないか」、そんな風に思い込んでしまう。思いつめてしまいます。さらに続いていくと、「もう消えてしまいたい」「こんな苦しい嫌な世界に居たくない」、そうなると、「死にたい」という気持ちが、自分の内側から自然と沸き起こってきます。

ですから、この「死にたい」という気持ちには「孤独」がつきまとっているというか、「死にたい」

という気持ちというのは、「孤独が突きつけられた状態」なのだと私達は考えています。

縁起の法則で考えると、本当にその通りだなと思います。

一般的に、「あの人は強い人だ」とか、反対に「あの人は弱い人だ」と言われることがあります。しかし、縁起的に考えるなら、そのように固定的に強かったり弱かったりする人というのはいません。たまたま環境が恵まれていて、強くいられる関係に居る人は強い人間になれているのでしょうし、逆に、弱いと言われている人だって、その人自身が固定的に弱いとかそういう話ではなく、そうならざるを得ない環境に居たからそうなっている。これが仏教的な見方なのだと思います。

「死にたい」という気持ちは「病的な心理状態から生じる」とよく言われています。確かに、医療的にはそういう見方もあるのでしょう。しかし、因縁生起、「因と縁によって生じ起こるもの」という考え方で考えるなら、病人だけの特別な気持ちというより、誰だってそうなり得る気持ちなのだという方がピッタリくる。私達はそう考えています。

「死にたい」という気持ちを抱えた人、または、自ら命を絶った人、その心情を考える時、縁起で見ることが大切だということを日々痛感しています。

死にたい気持ちから離れさせるもの

では何が、その人を死にたい気持ちから離れさせることができるのでしょうか。この世界に居ても良いと思えるような気持ちの変化を起こさせる、孤独が和らぐ、その事についても確認していこうと思います。

時間があったらうちの可愛いチワワのワンちゃんの話をしようかと思ったんですが、あまり時間がないので止めておきます。要は、私は最近このワンちゃんに一番癒やされているということです。皆さんはどうでしょうか。しんどい時にちょっと楽になったり、癒される瞬間ってどんな瞬間でしょうか。

皆さん自身が死にたい気持ちになった時、周りにそういう気持ちになっている方がおられた時、そういう人から相談された時、何によって楽になったり、どういう存在によって救われたり支えられたりするのか、気持ちが和らぐのか、そんなことも縁起の思想で考えてみようと思います。

その方が、「温かいなぁ」とか「ハグされてるなぁ」って、そんな感覚になれる存在が、たった一つでも良いです、たった一つでも、そういう縁が結ばれるということが大切だと思います。

私たちが日々の活動の中でやろうとしてることは、まさにそういう存在になるということです。死にたい気持ちを持った人に、私たち自身が温もりを持った存在として関わり、その死にたい気持ちを持った方が、「この人温かいなぁ」とか、「この場所ってすごく居心地がいいなぁ」と思える。そういう場を提供することを大切にしています。

実際の相談

最初は泣きながら電話をくれて、「もうもうもう！無理だ無理だ無理だ！」って言いながら死にたいと訴える、そういう相談者の方がおられます。

私たちは、本当に心から、それこそ電話がかかってくる前から、死にたい気持ちを持ったこの人の孤独がちょっとでも和らいで欲しいと、その苦しさをいっぱい想像して、何とかその苦しさに温かい存在として関わりたいと思いながら声をかけます。それこそ最初の、「はい京都自殺相談センターです」っていう最初の一言目から、温かさを込めてかかるようにしています。

きちんとその温もりが伝わると、一〇分一五分お話をするだけで、絶望の淵におられた方が笑

うことさえあります。縁によって気持ちはいかようにでも変わり得るということを実感します。

死にたい気持ちを持っている人に対して、多くの人は何もできないと思うかもしれません。しかし、できることはあります。それは、私たち自身の温もりを相手に伝えるということです。

私たちは、仕事や学校、コミュニティのルールに縛られながら、本音を隠して、上辺だけのコミュニケーションでやり過ごして日々の生活をしています。

ところが、そのような表面上のやりとりでは温もりは伝わりません。この表面上のやり取りを超えたところ、本当の自分の根っこの部分。心からその人のことを心配したり、一緒になって泣くような気持ち。これが素直に相手に伝われば、死にたいっていう気持ちからもちょっとだけ抜け出せます。当然、死にたい気持ちが急にパッと明るくなって「よーしやるぞー！」とはなりません。ただ絶望的な孤独からちょっとだけ抜け出せる。自分のことを心から心配してくれる人が居るんだとか、自分が居ても良い場所があるんだとか、そういう感覚を持てるようになるということは実際に起こったりします。

阿弥陀仏とは温かさである

そして、この活動の大前提に、仏教のイメージがあります。私は浄土真宗の信仰を持っており、阿弥陀様とは温かさなのだと思ってます。

金子みすゞさんの「さびしいとき」という詩があります。

「さびしいとき」
わたしがさびしいときに、よその人は知らないの。
わたしがさびしいときに、お友だちはわらうの。
わたしがさびしいときに、お母さんはやさしいの。
わたしがさびしいときに、ほとけさまはさびしいの。

この中で、金子みすゞさんは「私が寂しい時に仏様は寂しいの」と詩っておられます。

人間って面白いもので、自分と同じように、自分の気持ちになってくれる存在がいると孤独じゃ

なくなるんです。皆と笑うと孤独じゃなくなるし、皆でご飯を食べて美味しいねって言いあうと孤独じゃなくなりますよね。それと同じように、「死にたい」という気持ちも、一緒になって涙してくれたり、「そうだよな、もう死にたいよな」って言ってくれる存在がいると、それだけで、ちょっとだけ孤独から解放されることがあります。私自身は、この究極が阿弥陀様なのだと思っています。

私は大学のとき救済論を研究していました。救われるとはどういうことか、それは絶望的な孤独から解放されるという事です。この世界に、自分の一番一番根っこのところを分かってくれる存在がいる。わかろうとしてくれる。自分と同じように悩んでる人達がいる。そのことに出会う。その究極のところが、阿弥陀仏というはたらきだと、私自身は考えているということです。

もちろん、この京都自死自殺相談センターはＮＰＯ法人ですから、仏教者に限らない活動で色んな方が集まってくださっています。たとえ仏教の信仰がなくても、孤独から解放されるって事がいかに大切なことなのか、自分自身が温かな関わり方をすれば、目の前の凍えてる方がちょっとでも温まるということが実際にあるのだということはわかってくださいます。

私自身は仏教的なベースを持ちつつ、そこから一般化した形でみんなと理念を共有しながら活動しているということです。

仏教と自死

仏教では自死をどう考えるのかということについて簡単に申します。

特にご遺族の方は、「自ら命を絶つと地獄に落ちる」というようなことを言われて傷ついたということをおっしゃる方がおられます。しかし、仏教的にはそんな考え方は全くありません。

特に浄土真宗の場合は平生業成の教えがあります。今この時の救いです。臨終にどんな亡くなり方をしてようとも、その亡くなり方と、命を終えた後の生は全く関係ない。影響しないという考え方があります。

ご遺族の方と関わる時に、仏教的な視点、考え方、世界観、生命観、そういうものを持ってると、すごく一貫性を持って、軸を持ってブレずに　触れることが出来るなと思っています。

TERA Energyの起業について

さて、突然なぜ電力会社なのかと思われると思います。しかし、私の中では一本道でした。

今の日本社会もですし、世界でもそうだと思いますが、自死や自殺ということに対して、お金は集まって来ません。

相談センターの活動について、「大事だね」とか「重要な活動だね、応援するよ」とは言ってはくれますが、そこで活動している人達が本気で人生をかけて取り組んでいくだけのお金は集まってこないのです。

これは一つの課題だと思っていますが、そもそもこのような活動に関わりたいと思ってくれる人、温かく関わってくれる人って、今の現代社会ではなかなかお金を生み出すような仕事に就きにくいという現状があります。そういうところに目線がいったり、そういうことを繊細に感じ取れると、今の社会で生きていくのはしんどいでしょう。傷つけられる事ばかりだと思います。

相談センターで頑張って活動してくれる相談員の皆さんは凄く素敵な方達で、凄く素晴らしい能力を持っておられます。ところがそれだけで生活することはできません。食っていくことがで

きないんです。どうにかして、そういうところにお金が集まる仕組みができないとやっていけません。

そんな課題についてあれこれと考えていたとき、龍谷大学で仏教と環境をテーマに研究をされていた本田先生が主催する「仏教と環境」という勉強会に参加しました。私は元々は環境問題には興味がなかったんですけれども、参加した時に凄く面白い事例を聞いたのです。

ドイツで電力自由化になったときに田舎のおっちゃんおばちゃんが電力会社を自分たちで立ち上げたという事例です。

そこの村には赤字路線のバスがあり、廃路になると言われていたんですが、おっちゃんおばちゃんが立ち上がって電力会社を作り、その収益でバス会社を買い取り、完全無償化でバスを走らせているということなんです。

それを聞いた時に「これだ！」と思いました。日本も２０１６年に電力自由化になり、私たちもやろうと思えば電力会社が作れる。

ドイツの事例と同じように、電力会社で得たお金を自死の活動に使えば良い。電気はインフラですから、継続的にお金を自死の活動に回すことができます。「これしかない」と思い、電力会

社を立ち上げることになりました。

よろしければ、皆さんも、ネットでTERA Energyと検索していただいて電力会社を切り替えていただくと、電気代の2・5％が応援したい活動に寄付できるようになっています。寄付先も沢山あり、選ぶことができますので、是非よろしくお願いします。（笑）

環境問題について

そういうことですから、最初は自死問題に取り組むスタッフの生活のため、という動機でスタートしたのです。しかし、実際にやるようになってみると、環境問題そのものにも関心が出てきました。今は、「環境問題は命の問題だ」と思っています。私たちの、生活、貧困とか自死のことにも凄く影響している大事な命の問題なのです。

皆さんが日々なんとなく使っている電気、これがどうやって作られているのかというと、例えば火力発電なら石油です。石油は中東などの国外から、穴を掘って石油を採り、日本に持ってきて、それを燃やして、蒸気でタービンを回して発電しています。電気は世界各地に繋がっている

わけです。私たちが使っているエネルギーが、実は石油をバンバン出すことに繋がっているということを私たちは知っています。

しかも、そこで出たCO_2は、地球温暖化、気候危機を推し進めていっています。人間が出しているCO_2によって気候危機が進んでいると言われています。そのことを、私たちは既に知っています。

そして、気候危機が進み、色んな人たちが苦しんだり亡くなったりしているということも、私たちは知っているわけです。

さらに言うならば、自衛隊がシーレーンを護衛していますが、それも結局は石油のルートを確保するためにやっていたりするわけです。安全保障の問題にも繋がります。

私たちが使っているこの電気と、私たちのいろんな生活の中で起きている色んな課題が、実は繋がっている。恥ずかしながら、電力会社を起業することによって気づかされました。

先程は気持ちの面で縁起ということを考えましたけれども、私たちの日々の生活は世界中につながっているのです。

そんなことを痛感しているからこそ、TERA Energyでは出来るだけ再生可能エネルギーを中

心に集めるようにしています。原子力発電もなるべく使わないようにするべきだと思っています。

コントロールできない自動調整で入る二〇％くらいは再生可能エネルギーとは関係ないミックスのエネルギーだったりするんですけれども、自分たちが選べるところは全部再生可能エネルギーを仕入れています。本気でやる以上はそういったところにもシッカリこだわっていこうと思っています。

自分たちがやることで誰かが傷つくということがわかっているわけですから、分かってる以上はそうではないエネルギー、なるべく人が苦しんだり死んだりしない、そういうエネルギーを使いたいと思います。

もう一つ重要なのが料金です。同じ電気なのに凄く高い料金を払うって難しいですから、できるだけ手数料を抑えて、他の電力会社より安くしました。電気を切り替えることで、「お得に、社会に良いことができる」。「お得で、気軽に、社会貢献を楽しめる」という電力会社です。電力会社を切り替えることで、身近な活動に寄付できるとか、気候危機に対して私ちゃんとアクションしてるよって、胸を張って言えるようになります。原子力発電にはお金を払いたくないというアクションとしても使っていただけます。

自死のことへの貢献とか、気候危機への貢献とか、「私には何もできない」じゃなくて、「私は少なくともこれはやってるよ」って言えるような、そういうツールとして使っていただきたいと思っています。

1・5℃を目指す京都アピール

最後に、皆さんに参加していただきたいなと思いまして一つ紹介させていただきます。今京都市が京都アピールというのをやっています。

これは２０５０年までにCO_2排出量をゼロにするために頑張りますという宣言です。身近な所だと平安女学院が既に参加しておられます。先日は宗教者対象に紹介をして、いくつかのご本山に関心を持っていただきました。ぜひ、みんなで気候危機に一歩踏み出していただきたいと思います。

知ったなら、具体的な行動を起こす

自死のこともそうです。やっぱり、見ないフリではなく、知った以上は何か具体的な行動を起こすのが仏教者なんじゃないかなと私は思っています。困っていることとか悩んでいることとか、そういうことを目にしたら、自分にも何かできることはないかなとか、させて頂きたいなと、そういうふうに具体的に行動できるのが仏教者の一つのあり方だろうと思っています。

そして、そこに飛び込むということが、実は自分自身の生きる意味にもつながっていく。自分に納得して、頷いて人生を歩んで死んでいける、そうなるんじゃないかなと思います。

今日は、社会課題として、自死と気候危機を取り上げつつ、私たちの生きる軸として仏教がいかに素晴らしいものなのか、仏教を軸にすることで社会課題ビジネスでさえ凄く生き生きとした自分の生きる道になるという事を皆さんにお伝えさせていただきました。

それでは予定の時間になりましたのでこれで終わりにさせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

（文責在宗教部）

（二〇二〇年十月十八日　報恩講）

半身の死を生きる

川添泰信
（本学文学部　名誉教授）

川 添 泰 信（かわそえ たいしん）

1949年　　宮崎県出身。
1977年３月　龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士後期課程単位取得満期退学
1990年４月　龍谷大学短期大学部講師
1992年４月　龍谷大学短期大学部助教授
1998年４月　龍谷大学短期大学部教授
2003年４月　龍谷大学学生部長（～2005年３月）
2008年４月　龍谷大学文学部教授
2011年４月　龍谷大学実践真宗学研究科長（～2013年３月）
2015年12月　龍谷大学文学研究科長（～2017年３月）
2016年４月　龍谷大学宗教部長（～2018年３月）
2018年３月　龍谷大学定年退職（現在、龍谷大学名誉教授）
専攻分野は真宗学。

【著作】

『犀の角』－世界に拓く真宗伝道－（共編）永田文昌堂（2005年）
『聞思のこころ』自照社出版（2006年）
『親鸞浄土教と師弟像』自照社出版（2009年）
『高僧和讃講讃』永田文昌堂（2010年）
『半身の死を生きる』（共編）自照社出版（2016年）
『イラストで知る浄土真宗』（監修）洋泉社（2017年）
『愚禿のこころ』永田文昌堂（2018年）
『うちのお寺がよくわかる！　図解浄土真宗』（監修）洋泉社（2019年）
『選擇註解鈔講述』永田文昌堂（2019年）

ほか論文・教材・記事など多数。

本日は、龍谷大学の報恩講ですが、コロナ禍の影響で、例年とはいろいろな部分で少し変わった形になっています。壇上から見える景色もソーシャルディスタンスの関係で様子が通常とは異なっています。また講演の時間も、これまでの半分程になっていますので、早速内容に入っていきたいと思います。

半身の死

今日の講演のタイトルは、ちょっと変わったタイトルだと思われているかもしれませんが、私と谷本光男先生[1]とが対話をして出版した共著[2]のタイトル名です。

書名にある「半身の死」とは、谷本先生が病によって半身不随になられたご自分のことを自己規定された言葉です。本のタイトルを決めるときに、最初、二人で話をしていて、この言葉を考えたときに「この言葉、使ってもいいのかなぁ…」という思いがありました。しかし、この言葉は他の誰かに対していう言葉ではなく、先生がご自分のことを規定しておられる言葉ですので、最終的には本のタイトルとして使うことになりました。

ネイティブアメリカンの教えと仏教

それでは最初に何故このような企画をし、本にしようと考えたのか、という動機についてお話したいと思います。

ところで、よく耳にする人生訓として、次のような言葉があります。

あなたが生まれたとき、
あなたは泣いていて、周りの人たちは笑っていたでしょう。
だからいつかあなたが死ぬとき、
あなたが笑っていて、周りの人たちが泣いている。
そんな人生を送りなさい。

皆さんもどこかでお聞きになったことがあるかと思います。最初は、有名な方が言われた言葉なのかと思っていましたが、実は、この言葉を伝えているのはネイティブアメリカンです。少し

前まではインディアンと呼ばれていた人々です。私が抱いていたネイティブアメリカンのイメージは、弓を持って馬に乗り、荒野を駆け回っているような、そのようなイメージしかありませんでした。だからこの人生訓がインディアンの世界で伝承されている言葉だと知ったときには、いささか驚きました。

この人生訓には、「生」――生まれること、「死」――死ぬこと、が説かれています。その後に、「そんな人生を送りなさい」と、「生」と「死」の間にある「人生」の生き方について説かれています。

仏教では、「生」と「死」の間に「老いること」「病気をすること」が入って、人生は「生老病死」であると説かれています。親鸞聖人も、「生死出づべき道」を求められた方です。ずいぶんと昔ですが、私も「親鸞聖人の生死観」に関する論文を書いた記憶があります。

しかし、仏教・真宗の勉強をしながらも、自分の心の中で、ずっと何か鬱々と引っかかるようなものがありました。ネイティブアメリカンは「生」と「死」の間の「人生」について、「そんな人生を送りなさい」といわれるように、いわば人生の歩むべき姿を問題として取り上げるのに対して、仏教では、「老」「病」ということについて、あまりハッキリと直接的には説かないのではないだろうか、「生き方」を具体的に問題とする機運が希薄なのではないか、という印象を持っ

ていたのです。

もっとも、近年はさまざまな形で「老」「病」に取り組んでいる方々が沢山おられます。それでも、まだまだ十分ということではないでしょう。そういう思いが私の一番根底にあって、そのことが、このような企画の本を考えようとした動機であります。

谷本先生の病

さて、具体的なことがらですが、谷本先生は、平成一六年（二〇〇四）の七月六日、大学での会議中に脳卒中で倒れられました。そこから半年間、リハビリに励まれたのですが、右半身が不自由になってしまわれたのです。

先生は、脳の奥にある視床というところを損傷されました。私が先生に、「その視床というのは、どういうはたらきをする部分なのですか?」と聞いたところ、次のように説明されました。

おそらく、関西の人であれば、すぐにピンとくるだろうと思うのですが、阪急電車に十三という駅があります。十三は、神戸・大阪・宝塚・京都など、関西にある主要な場所に行く際に中継

となる駅です。視床が傷ついたというのは、たとえるならば脳の中の十三駅のような役割をする部分が傷ついたようなものなのだそうです。

路線同士の連絡が上手に取れなくなったように、身体の主要なところとの連絡が上手に取れなくなった、という説明をしてくださいました。

先ほど申しましたように、仏教では「生死」については問題にしても、「老」や「病」について具体的に、一つのテーマとして問題にする機運が希薄であるように感じていたので、先生はリハビリの継続中ではありましたが、ともあれ大学に復帰された谷本先生と、そういうことについて話をし、いろいろ教えて欲しいと思いました。

二〇〇七年になって、事前に先生と相談した上で、質問項目をリストアップいたしました。親しいからこそ、普通はなかなか聞き難いようなこともお聞きしようと思っていると、質問項目は結構な数になりました。脳出血の具体的な事柄・病院での生活、闘病・日常生活の変化、家庭での変化・職場での変化、社会活動の変化等の項目をリストアップし、それから更には、死の意味とか命の意味・生きるということの意味などです。そして、先生ご自身が哲学を専攻された方であり、特に倫理学を専門としておられたので、現代における医療技術について・社会システム・

環境問題など、また、学者としての立場から、倫理学の役割について、そしてそれは、病を得られてからの立場から見た場合は今までとは違っているのか、そういうことを質問項目として挙げました。

先生がよく強調される言葉に「寛容」という言葉があります。相手を許すということです。これからの時代は、やはり「寛容」という言葉がキーワードになるんじゃないか、と先生は度々言っておられましたので、そういうことについても質問したいと思いました。

そして、私の専門である真宗学という立場もありますので、宗教の意味についてもお聞きしたいと思っていました。谷本先生は広島県のご出身です。その影響もあるかも知れないとご自身で言われていたのですが、親鸞聖人について意外と関心をお持ちでありましたので、どのように関心をお持ちなのか、そのようなことについてリストアップしていきました。

そして、そのリストを先生にお渡ししました。しかし、お渡ししてすぐに話をしたわけではなく、そこからお話しするまでに半年以上の時間を取り、ようやく二〇〇八年にリストに挙げたテーマを基に話をいたしました。

谷本先生との対話

大学の授業も終わり、夏休みに入る頃の二〇〇八年七月三〇日から八月二日までの四日間、一日に四～五時間の間、谷本先生の研究室で録音をしながら、二人で対話をしました。

ちなみにタイトルにあります「半身の死」はその対話の中で言われた言葉です。自分の体の半分の死、半分がもう死んでるもののようにしか思えない、という意味で言われたのでしょう。

ところが、その対話のすぐ後に『半身の死を生きる』の本が出たわけではありません。実際にこの本が出たのは　二〇一六年の一月です。対話が行われてから八年後になります。

というのも、私の方が短期大学部から文学部に移籍をするというようなこともあり、さまざまなことで、いささか多忙になり、編集を行う時間がなかなか取れませんでした。また、録音したテープは二〇時間以上もありましたから、そのテープを文字に起こすというのもかなり大変な作業です。学生さんにも頼んでいましたが、なかなか進まないということで、あっという間に時間が経ってしまったのです。

しかし、二〇一六年の三月に谷本先生が早めに龍谷大学を退職されるということになりました。

それで「ならば記念に！」と思いまして、急ピッチで作り上げたのです。実は、この本の一番最初に、小さな字で「龍谷大学退職を記念して」ということが書いてあります。

その後、谷本光男先生は二〇一七年一〇月一八日に亡くなられました。ご遺骨は先生の希望によって大谷本廟の龍谷大学の納骨堂に安置されました。

この本の表紙には「「哲学」を学ぶ者と、「真宗」を学ぶ者との対話」と書かれているように、決して「対談」ではありません。「対談」はお互いが自己の見解にもとづいて問題を議論するということだろうと思いますが、この度の「対話」は、わたしが谷本先生から、先生ご自身の思いをいかに引き出すことができるか、それが今回の「対話」の主旨であり、私の役割でした。そのようなこともお伝えして「対話」を始めました。途中、「対談」のようになっているところもありますが、基本は谷本先生の思いを私がいかに引き出せるかどうかです。それが上手くいったかどうかは分かりませんが、私のスタンスとしてはそのような立ち位置で話を始めました。

さまざまな困難と二重のブロック

谷本先生が次のようなことを言われていました。先生は入院されて半年後に退院されるのですが、その入院している時に担当の医師から「学校の教員として復帰できますよ」と言われたのだそうです。

そして、先生は実際、大学に復帰されたのですが、しかし、そこには想像を絶する困難があったということです。いくつか申し上げたいと思います。

学校では、毎日かなりの量の書類がメールボックスに届きます。封筒に入った大きいもの小さいもの、さまざまなものが届きます。これが、右半身が使えなくなると大変なのだそうです。対話のために研究室に行くと、最初に突然「右半身が使えないと、封筒を開けることがいかに困難か、わかりますか?」と言われました。

そこから先生は「こういう風に今はやっているんです」と、実際にやって見せてくれました。正直に言って、これまで、私は封筒を開けることが大変だなんて思ったことがありませんでした。今まで両手で開けていたその利き手が使えなくなると、封筒を開けるという作業がいかに困難で、

さらにそこから書類を引き出すということがいかに大変なことか。それを実際に目の前でやって見せてくださったのです。それは、今でも私の脳裏に残っている光景です。

それから、谷本先生は復帰されて初めの頃は大学に車椅子で来られていました。そうすると、学生さんたちが意外と気楽に「先生、車椅子を押しましょうか」と声をかけてくれたそうです。龍谷大学は随分前からバリアフリーに取り組み、「障がい者に優しい大学」ということに力を入れてきています。おそらく、そういう大学の姿勢が学生さんにも浸透しているのでしょう。「それは非常に助かった」と話されていました。しかし、もちろんいい面ばかりではありません。まだ復帰されてまもなくの頃のことです。私は先生をお昼ご飯に誘いに行ったのですが、「嫌だ」と断られてしまいました。自分の姿を見られるのが嫌なのだということでした。と同時に、次のような話をされました。これも、なかなか当事者でないと分からない感覚だと思います。食堂に行くのも同じなのですが、日々の講義で、教室に行くのにエレベーターに乗って昇り降りしなければいけないところがあります。そのエレベーターの中に車椅子で乗ると、学生さんが全員私を見下ろして、そして私は見上げないといけない。これは感覚的な問題ですが、やはり嫌な気持ちになるそうです。

それから、こんな感想も言っておられました。自分の半身が不自由になって、それまで学校の中で気さくに話しかけてくれてた人が、なかなか声をかけてくれなくなった。そんなことも言っておられました。この点について、

「今まで気楽に話をしてくれていた人が、私が今までと違う姿になったので、その私に嫌な思いをさせたら悪いから、という優しい気持ちから声をあまりかけてくれなくなったんじゃないかな。だから、優しさから声をかけてくれないのだろうと思う。」

ということを言っておられました。

それは先生ご自身が分かっておられることなのですが、分かっていてもやはり嫌だという思いはあったのだろうと思います。

ここには二重のブロックがあるのだろうと思います。一つは、障がいを持った人が持つ感情的に「嫌だ」という「嫌悪感のブロック」、そしてもう一つは、接する側が、今までと違う姿になった人に対して優しい気持ちを持つことで、それがかえって接することから遠ざけてしまうという「優しさのブロック」です。このように、両方の思いからの二重のブロックがあるのではないかなと思います。

絶え間ない痛み・感謝の想い

体が不自由になって車椅子を使うようになると、周りの人の世話にならざるを得ないときが出てきます。私は「当然そこには感謝の思いがあるのだろう」と勝手に思っていました。しかし、先生と話したときに驚くような発言を聞きました。それは、最初は車椅子で近所を散歩したりしていたのが、そのうちに自分で杖をついて散歩できるようになった。杖をついて近所を散歩をしていると、顔見知りの近所の年配の女性の方が、先生に話しかけて来られて、そして何と言われたかというと、「いやあ、いつも奥さまがお世話をされて、感謝ですね。感謝しなきゃいけませんね」と、こんなことを言われたというのです。そして、その時に、先生自身はどう思ったかというと、「そんな感謝の気持ちなんてどこにもない」と思ったと仰ったのです。私はそれを聞いて、最初からの計画では、この録音テープはいずれ本に成って、ひょっとしたら先生の親しい方々も読まれるかもしれないのに、こんな内容を読まれたら申し訳ない、と思ったので、先生に「そうは言っても、少しは感謝があるでしょう?」と何度も質問をしました。それでも先生は「感謝の想いはどこにもない」と仰られたのです。先生はなぜ感謝の思いは「ない、ない」と頑強に言われたの

か、最初は理解できなかったのですが、このことについては、次の説明を聞いて納得いたしました。それは、脳の視床が傷つくと、視床痛という痛みがあるのだそうです。二十四時間三百六十五日、ずっと絶え間なく痛みがある。どんな痛みかと聞くと「正座をした時に足が痺れてジーンとするような鈍い痛み」と説明してくれました。それが二十四時間、頭の中にある。「そういう痛みがずっとあるような人間が感謝の思いなんて持てると思うか」、と逆に先生に聞かれました。「そんな余裕はない」と言われて、私は何かもうそれ以上は質問ができませんでした。そうして話が途中で終わりかけたのですが、私があまりにもしつこく言うものですから、先生は「感謝ということについては、これから少し考えてみたい」と仰ってその話は終わりました。

「わかる」ということについて

二人の対話がなされ、その後、日々の教員生活に追われながらも、変わらない付き合いが続き、ずいぶんと時間が経ってしまいました。そして、八年後にようやく本が出版された後のことになります。谷本先生には失礼を顧みず、聞きづらいことも遠慮なく、さまざまなことを聞きました

から、私は先生のことがよく理解できたと思っていました。

ところで、本を出版するにあたっては、学生さんにもいろいろお世話になったので、私と先生の二人で、出版に際して助力してくれた学生さんにお礼をしたいと思いまして、京都駅の上のレストランでささやかな会食を行いました。

食事が終わって帰る時のことです。先生はタクシーで帰られますので、私はタクシーのところまで送りましょうと言って、エレベーターで二階まで降りました。その後、私は無意識に一階に降りるエスカレーターの方に歩きはじめてしまったのです。そうしたら、谷本先生が後ろから「そっちは駄目」といわれました。「エスカレーターには乗れない」、と。「ああ、そうかそうか」、と方向転換してエレベーターの方に回って降りました。

私自身、先生のことが分かっているつもりだったのですが、本当のところは分かってないのだな、ということを改めて教えられたような気がいたします。

対話の進展

ところで、「対話」について少し残念だったのは、「真宗を学ぶ」私にとって、先生と話したかった真宗に関するテーマまでは話が進展しなかったということです。たとえば「死」とか、それから、仏教・真宗に関係する「往生」とか「浄土」ということについて、自己の「死」に直面された先生といろいろ話をしたいと思っていたのですが、どちらかというと、先生ご自身が一番関心のある自分の身体・疾病に集中したような話題で対話が進みました。しかし、対話の二年後の二〇一〇年に『龍谷大学論集』[3]に「死」ついてのエッセーを発表されました。先生は対話の時にはなかなか話が進まなかった「死」というテーマについてもその後も考え続けられていたのです。そのエッセーは『半身の死を生きる』の第二部として転載しています。その中で、「死」について三つの問題に分けて書かれています。

一つ目は、「死は謎であるがそれはなぜなのか」という問題です。その答えは「残念ながらまだ私の結論は出ていない」ということでした。

それから二つ目は、「死の恐怖は何を意味しているのか。また死を恐れることは何に根拠があ

るのか」という問題。これについても答えは「残念ながら私にはまだ答えが見つかっていない」ということです。

最後の三つ目は、「死は悪いものなのか」という問題。そして、これについても答えは「残念ながら私にはまだ答えが見つかっていない」、と書いておられます。人間の究極の生死の問題は、誰しもが答えの出せない難しい問題だな、と改めて思っていることです。

「共生」と「響生」

谷本先生との対話を通じて私がどんなことを思ったのかというと、「対話をするという事は、相互に教え教えられることである」ということでした。

最近はどうか分かりませんが、一時期さまざまな場面で声高にいわれたことですが、龍谷大学でも、「共生」ということが盛んに言われたことがあります。

もう亡くなられていますが、黒川紀章（くろかわきしょう）という有名な建築家の方がおられました。この方が「共生」について話をされていたのを、たまたま見聞きしたことがあります。

もともとは浄土宗の椎尾弁匡（しいおべんきょう）という方が東海中学校の校長をしていたときに、仏教運動として共生運動を始められたそうです。丁度その頃に黒川紀章氏は生徒としてその中学校で学ばれていたようです。

しかし、私自身は「共生」という考え方には、なんとなく満足できないという思いがありました。『歎異抄』の第九条で、親鸞聖人の教え子であった唯円という方が、先生である親鸞聖人と対話するシーンが出てまいります。唯円が、「念仏をするようになったけれども、喜びの心とか浄土に往生したいと思うような心が少しも出てこないんです」ということを、親鸞聖人に申し上げます。すると、親鸞聖人は、唯円の問いに対して「あなたもそうなのか、実は私もそうなのだ」と返答されるのです。そして、親鸞聖人の教示は、喜ぶべきことを喜ぶことができない人間のために如来の本願は立てられたのだから、唯円と親鸞の両者ともに喜べないという事実は、だからこそ本願は、いよいよ間違いがないのだ、ということを証明しているのだ、と逆説的に展開するのです。しかし今この対話で注目したいのは、先生と生徒、師匠と弟子との「対話」が行われていたことです。そこには親鸞聖人・唯円の両者に、相互に心に響くものがあったのではないでしょうか。

そういうところから、私は、共生の「共」という字は、本質的にはお互いの心に響き合う「響」であるべきだと思っています。「共」はお互いが存在するということを表しているだろうと思いますが、しかし「共」にはただ存在するだけであって、そこには動き・働きということが感じられないのではないかと思います。人間の在り方としては、生まれてこの方、人は「共に響いて歩み」「共に響いて生き」ているのであろうと思います。このような意味において、「共生」は「響生」[4]でなければいけないのではないかと思っています。

人間は、言葉だけでなく、行為や、その他ありとあらゆることで自分と周りとが何らかの形で響き合っています。一瞬たりとも、響き合うことを休むことはありません。私は、人間存在とは、そのような形であるものだと思っています。

谷本先生はもう亡くなられましたが、先生との話は、今もって私に響いています。そういう意味で言うならば、私は今も先生と「響生」しています。

先生は、今も私自身にさまざまな影響を与えて下さっているのです。そう感じています。

時間が少しオーバーしてしまいました。これで私の報恩講の話は終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【註】（1）谷本光男先生の略歴については、『半身の死を生きる』の著者略歴を参照してください。

（2）『半身の死を生きる』谷本光男　川添泰信共著　自照社出版　二〇一六年（平成二八）

（3）「死」『龍谷大学論集』谷本光男　第四七四・四七五合併号　二〇一〇年、本エッセーは『半身の死を生きる』に第二部として収載

（4）かって『歎異抄』の親鸞聖人と唯円の対話について、「響感」は一般的には「共感」と書かれます。この「共感」の意味については、「他人の考え、主張、感情を、自分もその通りだと感じること、またその気持。同感」（『日本国語大辞典』第六巻一四八頁）といわれますが、ここでは相互に相手の心情をくみ取り、人間存在の根源において、ダイナミックに自身および相手に影響を与える意味において、あえて「響感」という造語を使用しました、と書いたことがあります。同じ意味において、日本語としては不適切かと思いますが「響生」の造語を用いました。

（文責在宗教部）

（二〇一九年七月一日　顕真館公開講演会　第一五三回）

お釈迦さまからのメッセージ
―生きるということ―

内藤昭文
（本願寺派法行寺住職・本学文学部元助教授）

内藤昭文（ないとう あきふみ）

本学元助教授・本学世界仏教文化研究センター客員研究員
1956年生まれ，大分県出身。
'86年龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程仏教学専攻単位取得満期退学。本学非常勤講師，本願寺派中央仏教学院講師，本願寺派教学研究所講師，同助教授を経て，
'02年　本学文学部助教授に就任（～'04年），
'04年　非常勤講師に就任。また京都女子大学非常勤講師，行信教校講師などを務める。
専門分野は仏教学（無我思想史・初期瑜伽行唯識思想）。

【著作】

『仏弟子に学ぶ―逸話に聞く仏教』（本願寺出版社 '94年）
『曇鸞の世界―『往生論註』の基礎的研究』（共著／永田文昌堂 '96年）
『仏伝に聞く仏教―お釈迦さまとその弟子』（探究社 '99年）
『浄土真宗における社会倫理』（共著／本願寺出版社 '00年）
『生死を問う―医療現場をめぐって』（共著／本願寺出版社 '01年）
『生きる力―宗教と倫理』（共著／本願寺出版社 '02年）
『釈尊の教えとその展開―インド篇』（共著／本願寺出版社 '08年）
『浄土真宗と社会―真俗二諦をめぐる諸問題』（共著／永田文昌堂 '08年）
『『大乗荘厳経論』「菩提品」の講読』（永田文昌堂 '09年）
『『大乗荘厳経論』第Ⅰ章の和訳と注解―大乗の確立』（共著／自照社 '09年）
『『大乗荘厳経論』第XVⅡ章の和訳と注解―供養・師事・無量とくに悲無量』（共著／自照社 '13年）
『『大乗荘厳経論』「無量の章」講読―第XVⅡ章「供養・師事・無量の章」の解読と解説―』（永田文昌堂 '17年）
『『大乗荘厳経論』第Ⅱ章の和訳と注解―大乗への帰依』（共著／法蔵館 '20年）
「『大乗荘厳経論』の構成と第Ⅸ章「菩提の章」の構造―ウッダーナ（X,k.1）の理解を踏まえて―」（『インド学チベット学研究』第13号）
「『大乗荘厳経論』第Ⅸ章における「法界清浄の六義」理解―<bauddhadhAtu>と<dharmadhAtu>の意図する構造―」（『インド学チベット学研究』第14号）
「『大乗荘厳経論』の構成と構造―二つのウッダーナ（MSA X,1＆XV.1）の理解を踏まえて―」（龍谷大学仏教文化研究所紀要第52号）
「タットブァサングラハパンジカーにおけるアートマン説批判」Ⅰ－1～Ⅳ－6（『龍谷大学大学院紀要』・『印度学佛教学研究』・『佛教学研究』・『南都佛教』・『浄土真宗教学研究所紀要』'82～'03年）
「仏教における業の意義」（『浄土真宗教学研究所紀要』5）
「流布語としての「我」―無我説の一断面」（『行信学報』11）
「倫理観構築の視点」（『日本仏教学会年報』69）

ほか論文多数。

【一、鏡の問い】

こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました内藤です。今回のテーマをお話しするにあたって、まず最初に、皆さん方にお尋ねをしておきたいことがあります。それは、私が龍谷大学に入ってしばらくしたとき、ある先生に尋ねられた質問です。

その先生から「内藤くん、鏡は右と左、反対に映りますね」と尋ねられ、素直に「はい」と答えました。すると、「どうして上下は反対に映らないのですか」と、再度尋ねられたのです。この問いに対して、皆さんならどう答えますか（注1）。

私はその時、即答したのですが、「違う」と言われ、宿題にさせていただきました。その後、先生に会うたびに尋ねられて答えるのですが、そのたびに「違う」と言われ続け時間

が過ぎました。私はもうこの話題から逃れたいと思い、先生に答えを聞きました。ですから、私はこの問題に答えられたわけではありません。先生から教えられた答えは、単純なものでした。

それは「内藤くん、鏡は、右と左、反対に映ってはいないよ」というものでした。この時、私は少々驚きましたが、自分が鏡に映っている姿を思い出してみると、先生の言われる通りです。鏡は右にある物を右に、左にある物を左に映しているだけです。だから、上にある物を上に、下にある物を下に映しているだけです。

この質問を受けるまで、私は、鏡というのは右と左が反対に映っていると思って日暮らししていました。あれから四十年以上が経っていますが、今でも、朝、鏡を見ていると「右左、反対だな」と思っている自分に気がつきます。どうして私たちは鏡を見ると、右左が反対だと思ってしまうのでしょうか。先生と仏典を解読しながら仏教を学ぶ中で、私なりに気がついたことは「私たちが自分中心にしか鏡を見ていないからだ」ということです。私たち人間（凡夫）はいつでもどこでも、何に対しても、自分中心にしか見ることができないのです。ですから、鏡は左右反対に映っていると思い込んでいるのです。本当に左右反対に映しているか、そのことを考えないまま、時間が過ぎていたのです。

例えば今、空は曇っていますが、雨が降ると私たちは「いい雨だ」「悪い雨だ」とどこかで判断をしています。いい雨、悪い雨というのは、実は言葉が足りていないのです。「私にとって」いい雨で、「私にとって」悪い雨です。雨そのものに善悪はありません。自分の都合があって、その都合に合わせて、いい雨だ、悪い雨だ、と判断しています。こういうふうに、自分中心に見てしまう人間の姿を、お釈迦さまは「我執」という言葉で指摘しています。自己中心的に見るだけではなく、それを正しいことだと思っていますから、それを省みることがありません。これも「我執」の心です。私たちは常に、「自分以外の者が悪い、間違っている」と考えています。人間の自分中心性を自覚することはなかなか難しいことです。だからこそ、お釈迦さまの教え、すなわち「仏教」に出遇うことによって、気づかされていくことが大切なのです。それが仏教に出遇うということだと思っています。

私は、自己中心的な見方をモノサシとして、それを正しいものだとして、仏典に伝わる言葉だけでなく、あらゆる物事を考えてしまっていました。それでは本当の意味で仏教に遇ったことにはならないということを私に、先生は「鏡の問い」で伝えて下さったと思っています。

龍谷大学の建学の精神は、そのような真の意味で仏教の智慧と慈悲に出遇った親鸞聖人という

方の人間としての「いのち」の生き方・姿勢にもとづいています。それは、私たちが人として生きる時に忘れてはならない、大切にすべきものは何なのかということを端的に標榜していると思います。大学で色んな知識を増やすことも当然大切ですが、何を学ぶにあたっても、その学ぶ「自分」が、どのような「いのち」であるのかを忘れてはいけません。その視点が仏教を聞き学ぶ上で重要であると思っています。

【二、「生死」とは】

今日は、二つのことを、皆さんにお話をさせていただこうと思います。

今、板書した「生死」の二字をどう読みますか。ほとんどの人が「せいし」と読むと思います。しかし、仏教を学んでいると、この字は「しょうじ」と読んで、お話を聞くことになります。日本の義務教育では、「せいし」と読ませて教えています。私にも子どもがいますが、小学校に上がった頃、この漢字に「せいし」と振り仮名を打って、花丸をもらって帰ってくるわけです。ところが、仏教の話を聞いていると、講師の先生が「しょうじ」と読むわけです。子ども心に不思議に

思ったのでしょう。なぜ「しょうじ」と読むのかと、尋ねられたことがあります。

下の「死」は、どちらも「し」です。「しょうじ」と濁音化していますが、それは、連声という発音の問題で、読み癖です。例えば、「山崎」という名字を、「やまざき」だとか「やまさき」とか発音するのかは読み癖にすぎません。「しょうじ」も同じことです。明らかに違うのは上の字、「生」ですね。「しょう」と読むか「せい」と読むかです。

皆さんも、漢字に訓読みと音読みがあることはご存知でしょう。その音読みに呉音読みと漢音読みがありますね。「しょう」は呉音読みで、「せい」は漢音読みです。いわゆる「時代の音」で、漢字の意味そのものに大きな違いがあるわけではありません。

一方、一つの漢字に複数の意味があります。日本人は器用で、音によって、どの意味が表に出てくるかを使い分けているといえます。皆さんも無意識に、「生」を「しょう」と「せい」に読み分けているはずです。例えば、「生活が苦しい」とは言っても「生活が苦しい」と言う人はいません。「誕生日」とは言いますが、「誕生日」と言う人はいません。このように、「しょう」と「せい」をきちんと読み分けています。それは音で意味が変わるからです。

「せい」と読む時は「生きる」という意味です。生活とか生命とかですね。他の意味を失うわ

けではありませんが……。だから、「生死」を「せいし」と読めば、「生きることと死ぬことと」という意味になります。それに対して、「生」を「しょう」と読めば、「誕生日」とか、物が「生起する」とかいうように、「生まれる」という意味が表に出てきます。「しょうじ」と読めば、「生まれることと死ぬこと」という意味になります。

災害などがあり、行方不明者が出ますとニュースでは「生死が分かりません」と伝えたりしています。このような報道を聞いた私たちは、「生きているのか死んでいるのか分からないのか、家族の人は心配しているだろうな」と思っています。その時は、私たちは「生と死はまったく違う」と考えています。「生きているということは死んでいない」「死んでいたということは生きてはいなかった」と考えています。知らず知らずのうちに、生と死は対立したもので、生の否定が死、死の否定が生であると、考えているのではないでしょうか。「生死の境をさまよった」という言葉があるように、生と死には境があって、生と死は全く異質で対立したものであると、いつの間にか考えてしまっているのが私たちだと思います。

それに対して、仏教の教えでは、「生死」を「せいし」と読むことは基本的にありません。何

か特別な法要の勤行で、漢音で読経する場合には「せい」と読みますが、それは稀なことです。基本的に「しょう」と読みます。お釈迦さまという仏の説法を伝える経典では、「生」は「生まれる」という意味で使われているからです。

【三、「生きる」とは？「生・老・病・死」ということ】

仏教の場合、「しょうじ」と読む時は、「生」と「死」のあいだに、二つの漢字が入ります。「生・老・病・死」という言葉を聞いたことはないですか。その最初と最後で、この「生」は「生まれる」という意味で、「生きる」という意味ではありません。

「老」は、「年を重ねる」ということです。何歳以上ということではありません。私が一年、年を重ねることは、一歳の子が一つ年を重ねることです。皆さんが十八歳なら、十八年の年を重ねてきたのです。それが「老」です。それは、皆さんと同じように、皆さんの親も十八年、年を重ねました。生まれたけれども、年を重ねないことはあり得ないということです。

「病」は「どこかが病む・傷む」ということです。病院とか病人という言葉がありますが、「病」

ということは、入院することではありません。

龍谷大学の実践真宗学研究科には田畑正久先生というお医者さんがいらっしゃいます（二〇一九年退職）。私の郷里は大分県の中津市で、その隣の宇佐市にある佐藤第二病院の院長先生です。田畑先生は仏教の教えに実に造詣が深く、医者として色々な形で仏教についてお話をされます。田畑先生とは親しくさせてもらっています。

最初に先生と出会ったのは、郷里で先生の講演会に参加した時です。その講演の中で、「私は、初見の患者さん、すなわち、今まで話をしたことも顔も見たこともない患者さんが診療室に入って来た瞬間に、その方と話をせずとも、どこが悪いか、百発百中で当てることができます」と言われました。私は「そんなことができるわけがない。こんなことを人前で豪語するというのは、うさん臭い先生だな」と、初めは思ってしまいました。ところが、次に先生は、「動脈硬化が始まっていますと言ったら、百発百中です」と言うのです。さらに、「二十歳、あるいは三十歳を超えて動脈硬化が始まる、そういう言い方をよくしますが、実は生まれたその瞬間から動脈硬化は始まっています。これは医学の上では、当たり前のことです」と言われました。

すなわち「病む」、「傷む」ということは、病気になるとか、ならないとかではなく、毎日の日

暮らしの中で起こり続けているのです。私たちは、病みつつ傷みつつ生きているということです。

個人的なことですが、私は四十九歳の時に交通事故に遭いました。バイクに乗っていて、車にはね飛ばされて七メートルほど飛んだようで、右肩は複雑骨折をしました。ヘルメットをかぶっていましたが、三日目か四日目に脳外科の先生が来て、「頭を打っている可能性があるのでＭＲＩを撮りましょう」と言われて、撮っていただきました。検査結果が出て、先生が私を見つめながら、「内藤さん、頭の血管がだいぶ切れておられます」と仰いました。驚いた私の顔を見て、先生は少し微笑まれて、「だいぶ切れておられますが、五十前の頭としてはいたって健康です」と、こういう表現をされました。「いのち」というものは、どこかが病み・傷みつつ生きている。それが「病（びょう）」ということです。

そして「死」ということは、臨終を迎えるということです。

すなわち、「生・老・病・死」という言葉は、生まれたものは、必ず年を重ね、必ずどこかが病み・傷み、必ず臨終を迎えるということを意味しています。言い換えると、「生まれたけれども、年をとらず、どこも傷まず、死なないような生き方はできない」ということです。

皆さんは、この説明を聞いて、「当たり前だ」とか、「そんなことは分かっている」と思ってい

るかも知れません。しかし、本当に分かっているか実は怪しいところです。「分かっていますか」と訊くと大概の人はうなずきます。うなずいた人に、「では、年をとりたくないと言ったことはないですか」と尋ねると、「言ったことがある」と必ず答えます。

年をとることを嫌がるとは一体どういうことでしょうか。「生・老・病・死」が「いのち」の営みですから、「年をとらない」ということも、「どこも傷まず、臨終を迎えない」ということも「生きてはいない」ということを意味します。私たちは身勝手な「いのち」の見方から、「年を重ねないこと」「どこも病まず臨終を迎えないこと」が「生きること」だと考えています。自分の自己中心的なモノサシで、「いのち」を真反対に観ているのです。

もう一度もうします。「生まれたものは、必ず年を重ね、どこかが傷み、臨終を迎える」のです。それが「いのち」の営みであり、姿です。それを私たちはどこまで受けとめて、毎日の日暮らしをしているのでしょうか。そのことを問い掛けているのが、実は仏教という教えです。

よく「いのち」を大切にしましょうと言われます。「いのち」を大切にするとはどういうことなのでしょうか。年を重ねること、どこか病みつつ臨終を迎えることを大切にできなくて、「いのち」を大切にできるのでしょうか。皆さんに、少しでも考えていただきたいと思います。

【四、「いのち」を大切にするとは】

例えば、赤ちゃんが生まれると、「おめでとう、生まれてきてよかったね」と、その新しい「いのち」を愛でますね。その「いのち」は必ず年を取ります。年をとらない「いのち」を恵まれ生まれてきた者はいないのです。ですから、年をとることを大切にできなくして、「いのち」を大切にすることはできないのです。どこかが傷みつつ臨終を迎える「いのち」を恵まれ生まれてきたのです。どこかが傷みつつ臨終を迎えるということを大切にできなければ、「いのち」を大切にすることにはなりません。

それを踏まえた上で考えてみると、私たちはややもしますと、「いのち」を粗末にしてしまっていることに気付きます。

私は今、浄土真宗の寺院の住職をしています。周りには、皆さん方の親や祖父母の年齢に近い方々が圧倒的に多いのです。その方々は、年をとることを悔やみます。思うように体が動かなくなったことを「ダメになった」とか、食べたい物が食べられなくなったことを「つまらんようになった」とか言って悔やまれます。単に「情けないなあ」と言われている時に、「辛いですね」と、

共鳴してお話をします。

しかし、あまりにも「つまらんようになった」と口にされると、私はいつも「本当にそうですか」と問い掛けています。私もそうですが、子や孫も必ず年を重ね、どこか病み・痛みます。それが「つまらんようになる」ことならば、その「いのち」はこれから、つまらんようになるために生きていくことになります。それで、「いのち」を大切にしていると言えるでしょうか。

確かに、体が動かないことは辛いことですし、食べられなくなることは寂しいことです。しかし、年を重ねさせていただいたからこそ、子どもや孫と出会うことが出来たわけです。子や孫と出会った慶び、それは年を重ねなければ味わうことのできない出来事なのです。どこが病む・痛むからこそ、それまで分からなかった人の優しさや親切を慶べるようにもなるのではないでしょうか。そして、共に生きることの有り難さやかたじけなさなどが身に染みて嬉しいのです。そこにご恩を慶べる人間の「いのち」の素晴らしさがあるのではないでしょうか。私たちが「いのち」の本当の営み・姿に気付かせていただくからこそ、犬や猫とは違う人間に育てられているのではないかと思います。

言い換えると、「年を重ねることはイヤ」だけど、「孫の顔を見たい」ということは、感情とし

ては分かっても、恵まれた「いのち」の営みを認めないことでしかありません。何もかもが、自己中心的な自分の思い通りになることはありません。自分のモノサシがどこまで正しいのかが問われているのです。そのことに気付くのは、身勝手な私の我執の心では難しいことですが、仏の智慧と慈悲に出遇って知らされていくしかないのです。

皆さんは龍谷大学に入学され、高校生から大学生になりました。そして、十八歳が十九歳になっていくことは、誰も止めることはできません。「年をとりたくない」と愚癡を言いながら十年経てば、その我執に振り回されるだけで、十年後には十歳年をとった自分になっているだけでしかないのです。傷みつつ生きて、臨終を迎えるこの「いのち」です。二度とない今日を「いかに生きるか」という問いを持って日暮らししてほしいのです。それが、お釈迦さまが私たちに一番伝えたかったメッセージなのです。

【五、仏伝における「四門出遊」の逸話】

お釈迦さまの仏伝の中に、「四門出遊」という逸話があります。お釈迦さまは釈迦族の王子と

して生まれました。何不自由のない生活が出来ていたのですが、それを捨て去り出家したのです。その動機を伝える逸話です。釈迦族の首都は城郭都市で、そこには東西南北の四つの門がありました。年齢は定かではありませんが、十四、五歳の頃だと言われています。お釈迦さまが友だちと外に遊びに出ることとイメージしてもらったら分かりやすいと思います。

ある時、東の門から出ると、お城の中では見たことのない人に出会います。一緒に遊びに出ようとしたカルダイという友人に「あれは何者だ」と尋ねると、カルダイが「老人と言います。人間みんな年を重ねていくと、ああなります。王子さまも私も例外ではありません」と答えるのです。それを聞いた王子のお釈迦さまは遊びに行く気力を失うのです。

またある時に、南の門から遊びに出ると、また見たこともない人に出会い、「あれは何者だ」とカルダイに尋ねると、「病人と言います。人間必ずどこかが傷みます。王子さまも私も例外ではありません」と返ってきました。お釈迦さまはまた気力を失います。

さらにある時、西門から出ると、お城の中で見たことのない出来事に出会います。お葬式です。「あれは何だ」と尋ねると「死人と言います。人間、必ず死を迎えます。王子さまも私も例外ではありません」と返ってきて、また遊びに行くのをやめてしまいます。

そして、ある時に北門から出ると、晴々とした顔をして颯爽と歩く人に出会います。カルダイに尋ねると、「沙門と言います。人間いかに生きるか求道する人です」と説明が返ってきたのです。それを聞いた王子のお釈迦さまは、自分もいつか沙門となって、いかに生きるか道を求めたいと思ったというのです。これが「四門出遊」の基本的な内容です。

ここには、先ほど言った「生・老・病・死」の老・病・死が語られていきます。なぜ「生」がないのかと言うと、お釈迦さまはもう生まれられているからです。生まれた者にとって「生きる」とは、年を重ね、どこかが傷み、臨終を迎えるということです。いかに年をとり、いかに病みつつ、臨終を迎えるかを考えることが、「いかに生きるか」という問いを考えることです。

この「老・病・死」は、年齢によっての相異はありません。五歳の子でも、二十歳の青年でも、五十歳の人でも、気づいたその時から年を重ね、どこかが病み・傷み、臨終を迎えることが「いかに生きるか」の共通する問いです。お釈迦さまは十四歳くらいでしたが、年齢として早い遅いがあっても、その「いのち」の営みには変わりがありません。そして、そこに善悪も賢愚もありません。そして、お釈迦さまは「いかに生きるか」の苦悩の青年時代を経て、二十九歳の時に出家を決意したのです。その出家の動機が「四門出遊」の逸話として伝わっているのです。

当然ながら、大学生になった皆さんも、「いかに生きるか」を考えていると思います。多分、「こういう仕事に就きたい」とか「こういうことをしてみたい」というようにです。しかし、それは職業という生きる手段です。たとえ、どんな職業に就こうとも、あるいは希望する仕事をしていても、必ず「年を重ね、どこかが病み・傷み、臨終を迎える」のです。それが「いのち」です。その営み・姿は、今から二千五百年前のお釈迦さま在世当時のインドであれ、今から八百年ほど前の親鸞聖人の時代であれ同じであり、まったく変わってはいないのです。

確かに、物が欠乏したり、災害や戦争が頻繁に起こったりと、環境や状況には違いがあります。しかし、その時代や場所を生きた「いのち」の「生・老・病・死」の営みは変わりはないのです。それだけは、しっかりと受けとめていただきたいのです。

それを我が「いのち」と受けとめた上で、どのような職業に希望し、どのような仕事をするのかを考えてほしいのです。自分の「いのち」を育ててくれた方々のご恩を慶び、未来の「いのち」のために、共に生きる人と共に、今をしっかりと生きつつ、年を重ねていくことが「いのち」を大切にすることになるのです。それに気付いてほしいというのが、仏教のメッセージの一つなのです。それが建学の精神の底流に流れているのです。

【六、お釈迦さまの回顧】

お釈迦さまは八十歳で亡くなります。晩年、出家して間もない若い比丘たちに、自らの若い頃の苦悩を踏まえて、次のようなことを説いています。

因縁不思議の中で生まれてきた者が、年をとることを忌み嫌うのは若さの驕りです。
どこかが傷むことを忌み嫌うのは健康の驕りです。
死を迎えることを忌み嫌うのは生命そのものに対する驕りです。

まず、「因縁不思議の中で生まれてきた者が」とは、お釈迦さまご自身のことですが、私たちのことでもあります。皆さんは生まれてきたことをどのように考えたり、思ったりしていますか。私たちが生まれたことは本当に不思議なことです。私には両親がいますが、両親がいたから私が生まれたかどうかは怪しいということです。仮に、両親が結婚したから私が生まれたのだと答えたとしても、両親が結婚したから私が生まれるかどうかも、実は怪しいのです。

私にも子どもがいますが、私が子どもと出会ったのは、私と妻が結婚したからだとは思ってはいません。皆さん方も、性教育は受けていると思いますが、不思議なことに、何億という精子の中からたった一つの精子が卵子に至り届いたから、新しい「いのち」が生まれたのです。それは、私の計らいを超えたことです。私の計らい心を超えた、本当に不思議な因縁の中で一つの「いのち」が誕生したわけです。「因縁不思議の中で生まれてきた者」ということは、自らの「いのち」をそのように受けとめていることです。つまり、「不思議」としか表現できない因縁の中で誕生した私たちは、必ず年を重ねる「いのち」を恵まれたのです。それを「いつまでも若い」とか「若さは延々と続く」と思ってしまうこと、これが驕りだったと言うのです。

次に、「どこかが病むことを忌み嫌うのは、健康の驕り」と言うのです。健康は尊いことですが、いつまでも健康だと思っていることが驕りなのです。また健康が第一だと執着している人がいますが、どこか病み・痛んでいます。そうすると、病んだり痛んだりした「いのち」を粗末にしてしまいます。私は、それが恐ろしいことに思えます。そして、「死を迎えることを忌み嫌うのは、「いのち」そのものに対する驕り」と言っています。それは、自分だけではなく、あらゆる「いのち」を否定していることになると思っています。具体的には、死別する人々にお礼や感謝の気

持ちを持てるだろうかと危惧します。葬儀などで、縁あった方々に、「ありがとうございました」「ご苦労さまでした」と、感謝の気持ちをもって見送ることが大切なのです。

お釈迦さまの出家するまでの苦悩の姿は、時代や場所、環境や状況の相違は当然ありますが、「生・老・病・死」の営みに対する苦悩の内実は何も変わってはいないのです。

【七、「諸行無常」ということ】

皆さんは「諸行無常」という言葉を聞いたことがあると思います。仏教の根本的な教えは「四法印」といわれる四つにまとめられます。その「四法印」とは「諸行無常」「一切皆苦」「諸法無我」「涅槃寂静」の四つですが、これらは密接に関連しています。今日は、その一つ「諸行無常」についてお話しします。

この「諸行は無常である」の「諸行」とは、当面は「すべてのもの」と理解していただいて結構です。「すべてのもの」とは、今皆さんの横にいる「友人」でも、今使っている筆記用具やノートでも、あるいは大切にしている物があるとしたら、それでもいいです。「すべてのもの」ですから、

例外なく何であってもよいのですが、まず「自分自身」を考えてもらうのが大切です。

さて、「無常」とはどういうことだと思いますか。「無常」という言葉を、自分はどういう意味に使ってきたかとか、どういうイメージをもっているかなど、自問自答してみてください。そして、これからお話しする内容を踏まえて、考え直してみて下さい。

この「無常」という言葉は、インドのサンスクリット語の「アニティア（anitya）」の漢訳語です。訳したのは、皆さんも知っている『西遊記』、孫悟空の話に出てくる玄奘（げんじょう）という人です。

テレビドラマの西遊記で、私たちの頃は夏目雅子さんが玄奘、堺正章さんが孫悟空を演じました。皆さんよりも少し上の世代だと、深津絵里さんが玄奘、香取慎吾さんが孫悟空を演じました。再放送などで見たことがある人もいると思います。玄奘という学僧は、西暦六〇〇年代の人で実在の人物です。ドラマでは女性が演じていますが、男性です。

この玄奘が「無常」と訳語決定してからは、以後の漢訳者、つまり翻訳者（三蔵法師）はほぼ誰もが「無常」と訳すようになりました。玄奘三蔵によって「辞書が完成した」と思えば良いと思います。皆さん、英語の文章を訳す時は辞書を頼りにするでしょう。それと同じです。

ところが、それ以前は、翻訳者が自分の語彙力などによって、さまざまに訳していました。そ

の中で、皆さんが「無常」よりも良く知っている言葉があります。「非常」という言葉です。現代でも「非常」はよく使いますね。「非常事態」のように使います。昨年の広島や岡山の水害、また東日本大震災など。記憶にあると思いますが、あのような事態を非常事態と言いますね。

【八、ある学生との対話】

昔「仏教の思想」の講義をしている時に、「非常事態」ってどんな状態ですかと質問していました。一番多い答えは「普通じゃない状態」「いつもじゃない状態」などでしたが、皆さんにもそう答える人があるかと思います。

私はその時、そう答える学生に、「いつもの状態って、どんな状態ですか」とか、「普通じゃない状態って、どういう状態ですか」と尋ねます。すると、なかなか答えが返ってきません。今から二十五年ぐらい前に、法学部の学生の一人が、それまでの学生とは異なる答えをしてくれました。その学生は私を見据えて手を挙げ、「自分の生命が危険にさらされる状態を非常事態と言います」と答えてくれました。私は嬉しくなりました。彼には、真剣に答えてくれたお礼を言いま

した。積極的に手を挙げて、自分なりに考えた答えをきちんと説明してくれたからです。

お礼を言った後に、彼に「では、今は大丈夫ですか」と逆に問い直しました。そうすると、その周りにいる学生は「この先生は何を言っているんだ」という顔をしていました。中には、薄笑顔を見せる学生も何人かいました。ところが、その学生自身は、その瞬間から、一切口をきかなくなりました。下を見て、黙って考え事をしていました。最初は何度か声を掛けたのですが、それでも下を向いたまま何も言わないので、声を掛けるのをやめて、残りの授業をしました。

授業が終わって演壇を下りようとすると、その学生が近寄って来て、「先生、すみませんでした」と、私に対して謝りました。「どうしたんだ」と尋ねたら、彼が「先生に、今は大丈夫かと言われた瞬間、私はあることを思い出してしまって、そのことを考えて何も言えなくなりました」と言うのです。「何を思い出したのか、よければ聞かせてほしい」と言うと、彼は次のようなことを言いました。

彼は小学校三年生の時、朝、お母さんに見送られてお父さんと一緒に家を出たそうです。いつものように一緒に歩き、途中で自分は小学校へ、お父さんはそのまま駅へ向かって行ったそうです。教室に入ってしばらくすると、先生が呼びに来て、すぐ家に帰るように言われました。何が

なんだか分からないけれども、先生に送られて家に帰ると、お母さんは彼を連れて病院に行ったそうです。お父さんは、彼と別れてすぐに、交通事故に遭って、亡くなったのです

「先生から『今は大丈夫か』と言われた時、『大丈夫』と答えようと思ったけれど、その時のことが頭をよぎって、『大丈夫』と答えられなくなりました」と彼は言うのです。「辛いことを思い出させて、すまなかった」と言うと、彼は「いえ、大丈夫です。考えさせて下さい」と言って、教室を出ていきました。

私たちは「まさに今は大丈夫」と思って日暮らしをしています。しかし、その「今」は不思議な因縁の中にあって、生・老・病・死の「いのち」を生きています。今日の日暮らしは当たり前で当然だと受けとめています。しかし、どういうことが今の私たちの日暮らしの上に起こるか、それは私たちがいくら知りたいと望んでも、誰も分からないのです。近年急増する自然災害など、私たちの知り得ない因縁によって生じているのです。

「諸行無常」の「無常」は「常」の否定です。言い換えれば、私たちが当たり前で当然のことと考えていること、「ふつう」「いつも」という「常」を、仏の智慧に触れて否定され、今生きていることの因縁一つが無くなると、どうなるか分からないものであることを知らされているので

す。言い換えれば、今日の「いのち」の営みは不思議なことであり、当たり前ではないと知らされているのです。

具体的に言えば、「内藤、お前が考えているものは何であったとしても、お前が考えているように当たり前で当然のことではない、普通のことではない」と知らしめているのです。今日の「いのち」の営みは有ること難いものなのであるということです。これがお釈迦さまの私たちに対するメッセージなのです。

「非常事態」は、私たちが「いつもではない」「普通ではない」状態と考えていますが、その「いつも」とか「ふつう」ということは本当にあるのだろうかということです。今、私たちの身の周りにあることは、二度と無いことであることを、皆さん方には考えてほしいと思います。私の自己中心的な眼では変わらぬもののように見えていても、毎日因縁によって変わっているのです。「諸行無常」とは「すべては無常である」という意味の前に、まず、私が「常」、すなわち「いつも」「ふつう」と考えているものが、「常なるものでは無い」、「常なるものに非ず」というメッセージなのです。今日は昨日とは異なる一日なのです。つまり、毎日が「いつもと違う一日」であり、大げさに聞こえるかもしれませんが、毎日が「非常事態」なのです。その意味で、「いのち」

などのすべてのものが唯一無二のものであり、またあらゆる出遇い・出来事も二度と無いものなのです。だからこそ、それらのすべてが尊いのであり、大切にすべきことなのです。

【九、阪神淡路大震災を通して】

皆さんが生まれた直後のことですが、一九九五（平成七）年に阪神・淡路大震災がありました。一月十七日の早朝でしたが、その時、私は神戸港にいました。

親鸞聖人のご往生は一月十六日で、それに合わせて日本全国の浄土真宗の寺院では「報恩講」という法要を勤めます。龍谷大学でも、毎月十五日（深草学舎）と十六日（大宮学舎）で、ご命日法要というかたちで勤められていますが、一月十六日が祥月のご命日です。

大分の私が住職を務める寺院でも、十六日朝座まで一週間、報恩講を勤めていました。十六日の夜にフェリーに乗って、子どもたちと一緒に京都に上ってきている最中でした。十七日の六時半に神戸に着岸する予定のフェリーが、神戸港沖に停泊している時に阪神・淡路大震災が起こりました。皆さんも記録映像などで見たことがあると思いますが、阪神高速がVの字に折れていま

した。ニュースの映像では、阪神高速が横倒しになっている風景を映しつつ、アナウンサーが「倒れるはずのない物が倒れています」と繰り返し言っていました。私自身もその時は、「まったくその通りだ」と思って聞いていましたが、後から考えてみると、「倒れるはずのない物があるのか」と、逆に気付かせていただきました。「倒れるはずのない物」はあり得ないわけです。

「いのち」は「生・老・病・死」と言うのに対して、建物などは「生・住・異・滅」と言います。新しく建てたものはしばらくそのまま住していますが、劣化などの変化で異なっていき、最後は滅してしまうということです。その意味で、「倒れるはずのないもの」「劣化し朽ちていかないもの」などないのです。しかし私たちは、それらを「倒れるはずのない物」、すなわち変わらぬ「常なるもの」と考えて、日暮らししてしまっています。

神戸市長田区は特に被害の大きかった地域です。三日後くらいに、テレビ放送の中で、長田区に設置された定点カメラの映像がありました。定点カメラというのは、余震などの状況を把握するために設置されるものです。その定点カメラの映像に、焼け野原になった町の姿を呆然と見ている一人の人物の後ろ姿が映っていました。その映像の中を、黒い物体が横切りました。それは五十ccくらいのバイクでした。バイクに乗ってきた人は、ゆっくり停めて降りるという行動では

なく、乗ってきたバイクをそのまま投げ捨てたのです。そして、その人が、焼け野原を見ていた男性に一目散に駆け寄ったのです。私の記憶に間違いがなければ、震災発生から三日目くらいの映像です。その頃には規制が始まって、緊急車両以外は外部から現場に入れない状況です。ですから、この映像に映っていた人は地元の人だということになろうかと思います。

バイクを乗り捨てて現れた人が、最初から映っている男性に駆け寄って行き、そのあと二人は抱き合い、そして肩を叩き合っていました。定点カメラには音がありませんでしたから、後は私の想像です。二人は抱き合って、「生きとったか！」と、再会を喜び合っていたのだろうと思います。二人の関係はわかりませんが、二十代後半ぐらいでしたから、兄弟か親戚か、あるいは同級生かも知れません。数日間探し回っていたのでしょうか、ともあれ出会った二人は生存確認をして、喜びを分かち合っていたのだと思います。

皆さんは毎日、友人と顔を合わせた時に、龍大のキャンパスで抱き合って喜びますか。そんなことはしないでしょう。私自身もです。私たちは、会うことが当たり前だと思って、日暮らししています。しかし、彼らは「無常」そのものを体験し、見てしまったのです。震災など無いに越したことはありません。しかし、悲しいことですが、震災に遭ったのです。そこで、「常なるも

のでは無い」という自覚を身の上に知らされたのです。そこに、出会いそのものを心から有り難いものであったことと自覚し、出会いそのものを素直に喜んでいたのでしょう。

一方、私たちはいつ何時に震災などが起こるか分からないと頭では分かっていても、今の状況が「常なるものがある」と思って生きています。言い換えれば、「またいつでも会える」と思って生活しています。今日の出会いも当然のこと、当たり前のことだと思っています。一つひとつの出会いを「有ること難い、かたじけないもの」としては出会っていないのです。「一期一会」と口では言うけれど、また明日も会えると思っていますから、今日の出会いを大切な出会いであると、素直に喜ぶことができないのではないでしょうか。

私たちがどんなにあらがっても、「いのち」は無常なのであり、出会いは当たり前で当然のことではないのです。震災などを通して、「いのち」が無常であり、その営みの出会いが当たり前ではないことを身の上で知らされ自覚することこそ、震災に遭われた方々の「いのち」を大切にすることになるのではないでしょうか。それは、「いのち」の出会いを何気ない日常の中で慶ぶことであり、無常を実感した者の輝きのように思われるのです。

【十、無常は観るもの】

多分ですが、皆さんは、「無常」という言葉に、儚い、悲しいイメージがあるかも知れません。確かに、出会った人と別れていくことや、出会いが続かないということは、寂しいことです。しかし、そのようなもの悲しいイメージが付随するのは、読み音が同じ「無情（なさけない）」と重なってしまうからだと思っています。

考えれば誰でも分かることですが、別れのない「いのち」の営みはこの地球上には存在したことはありません。そのような続かない、そしていつまでもあるものではないものに今、出遇っているのです。だからこそ、その今を大切にしなければいけないのです。それは、自分の思い通りのことではないかもしれませんが、でも不思議な因縁で生まれてきた者同士が出遇っているのです。それを自覚するところから喜びが芽生え、感謝が生まれるのではないでしょうか。今日、ここにいる皆さんにも共通することです。因縁不思議の中で「生まれてきた」者同士であり、生まれたばかりでは何もできないその「いのち」を必ず育てるという願いとはたらきがあったから、今日を迎えているのです。それも、老・病・死の「いのち」を恵まれ生まれたことです。

皆さんが迎えている今日は、二度とない今日です。明日も同じように龍谷大学のキャンパスで生活をしているかも知れませんが、その明日という今は、今日の今とは違います。一日、一年と時間を重ねているからです。それは唯一無二の「今」を間違いなく生きているのです。

そして、後悔しても、明日になれば今日に戻ることはできません。二度と取り戻すことのできない、戻ることのできない「今」を生きています。そういう生命の営みの大切さに気付くことを、仏教は「無常」という言葉で私たちに伝えてくれているのです。

その点ですが、仏教に「無常かん」という言葉があります。この「かん」はどういう字を書くと思いますか。多くの人は、感想文の「感」か、観光旅行の「観」、どちらかを書かれていると思います。仏教では観光の「観」です。「観」は、「みる」という意味です。皆さんが「みる」ことのできるものは、過去のものか、今のものか、未来のものか、どれでしょう。少なくとも、私が「みる」ことができるのは「今」でしかありません。「無常観」、つまり「無常を観る」という「無常」は今のものなのです。すなわち、今のあらゆるものが無常なのです。

一方、感想文の「感」は、思うこと、感ずることです。心で、将来のことや過去のことを考え

て、寂しく感じたり、あるいは未来を不安に思ったりします。逆に、過去に喜びを感じたり、未来に希望を思ったりします。当然、今を感じることもできます。「感」は、今だけではなく、過去、未来に通ずるものです。あくまで基本的なことですが、「感」は心のはたらきで過去・現在・未来に通じますが、「観」はみることであり、今現在だけに限ります。心で感じる「無情」は過去・現在・未来の事柄を今感じているのです。

すなわち、「無常」とは今因縁によって生じている現在のことです。震災や戦争が起こった時だけが「非常事態」なのではなく、今も「非常事態」なのです。それを「無常」が表しています。それは、二度とない縁の中に、二度とない出会いの中に、二度とない存在の中に、今の私の「いのち」を生きていることです。それを知ることは大切なことであり、そこに「いのち」を大切にすることがあり、そこに私の生きる人生があると思います。

確かに、自己中心的な身勝手な私自身が、いつでもどこでも「すべてのものを無常である」と観ることはできません。しかし、自らの「いのち」がそのようなものであると、お釈迦さまが説法され、それを「仏教」として場所を越え時代を超えて伝えてきたのです。そこには、場所や時代を超えた、大切なメッセージだと受けとめた方々が生きていたし、生きているのです。

【十一、最後に】

皆さんの一日一日の日暮らしは、大きな違いがないかも知れません。しかし、皆さんは一日一日、年を重ねつつ、どこかが病み、傷んでいます。昨日と全く同じ今日の「いのち」を生きることはできないのです。そして、昨日に戻ることは誰もできないのです。そういう「いのち」の営みに気付かせていただいて、一日一日を大切にし、二度とない出会いの中に今日を迎えているのです。そのことを慶ぶということの大切さを伝えているのが仏の智慧にもとづく教え、すなわち「仏教」なのです。そして、それは、いつでもどこでも私たちを見捨てることのない慈悲なのです。

ともあれ、無常な「いのち」の積み重ねの中に、皆さんの明日があり、未来があります。そういう「いのち」の営みを大切にすることを、今日の「いのち」を二度とない日々として、日暮らししてほしいと願っています。それが、お釈迦さまの願いの一つです。「仏の教え」とはそのメッセージなのです。龍谷大学でその仏の教えを含め、色んな学びを深めていただけたらと思います。そういうふうに、この大学を卒業したＯＢとして念じています。

普段考えていることの一端を皆さんにお話しさせていただきました。これで終えたいと思いま

す。ご静聴、ありがとうございました。

【註】（1）この「鏡はどうして左右反対に映るのか」という問いは、ＮＨＫの「チコちゃんに叱られる」で取り上げられていました。見た人もいると思いますが、二〇一八年十月十九日に放送され、二〇一九年十二月二十一日に再放送されています。番組上の答えは「「人それぞれの考え方なので」分からない」ということでした。これは科学的に解明できていないという意味で、この問い自体がネット社会でも話題になっていました。

（文責在宗教部）

（二〇二〇年十一月十六日　ご命日法要）

唯信仏語 ―愚者に落居する―

深川宣暢
（文学部教授）

深川宣暢（ふかがわ のぶひろ ―せんちょう―）

1953年生まれ，山口県出身。
'81年　龍谷大学大学院文学研究科博士課程真宗学専攻満期退学。
'81年　龍谷大学短期大学部講師，
'83年　文学部講師，
'84年　宗教部主事，
'88年　京都女子大学文学部講師などを経て，
'93年　龍谷大学短期大学部助教授，
'01年　同教授に昇任。
'02年より文学部に移籍し，現在に至る。
本願寺派勧学，同派西念寺（山口県長門市）住職。

【主要著作】

『日本仏教十三宗ここが違う』（共著／大法輪閣 '98年）
『仏教べんり事典』（共著／大法輪閣 '99年）
『真宗人名辞典』（共著／法蔵館 '99年）
『仏教―「いのち」と「こころ」―』（共著／自照社出版 '00年）
『生きる力―宗教と倫理―』（共著／本願寺出版社 '02年）
『摂取の法―すくいのみのり―』（永田文昌堂 '14年）
『一念多念文意』（安居講本／永田文昌堂 '14年）
『浄土文類聚鈔講読』（永田文昌堂／永田文昌堂 '15年）
「親鸞教学の二重の構造―救済の「論理」と「時間」―」（『龍谷大学論集』472／'08年）
「真宗伝道学方法論の考察―真宗教義と伝道学の方法―」（『真宗学』119･120合／'09年）
「伝道学としての真宗人間学―真宗における人間の存在と当為―」（『真宗研究』55／'11年）
「真宗念仏者における利他的行為（他者支援）の一考察 ―木越康・著『ボランティアは親鸞の教えに反するのか―他力理解の相克―』をめぐって―」（『真宗学』137･138合／'18年）
ほか多数。

ご讃題として『一枚起請文』、こちらをご讃題がわりに拝読いたします。どうぞ、目で追いながらご一緒に読んでみてください。

もろこし（中国）・わが朝に、もろもろの智者達の沙汰しまうさるる観念の念にもあらず。また、学文をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の子細候はず。ただし三心・四修と申すことの候ふは、みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候ふなり。このほかにおくふかきことを存ぜば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候ふべし。

念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし。

為証以両手印（※大切な証文であるから両手の印を押したということ）

浄土宗の安心・起行、この一紙に至極せり。源空が所存、このほかにまったく別義を存ぜず。滅後の邪義をふせがんがために、所存を記しをはりぬ。

建暦二年（※一二一二・法然聖人八〇歳）正月二十三日　源空（花押）

（『一枚起請文』／『浄土真宗聖典―註釈版―』1429頁）

ようこそお参り下さいました。今日は十一月のご命日ですから、旧暦で言いますと親鸞聖人の祥月のご命日ということになります。ただ、西本願寺では新暦でお勤めをしますから、祥月は一月ということになりますので、今日は通常通りのご命日法要としてお勤めしておるわけでございます。しばらくお聴聞ください。

「疑心あることなし」という聞き方

親鸞聖人が開かれた仏教は、阿弥陀如来のご本願、つまり仏の願いの生起・本末を聞いて、我々が仏陀に成長していくという仏教であり、仏道であります。本願がどのように生まれ起こったのであるか、そして、それはどのように私に届いているのであるか、はたらいているのであるか、これを聞かせていただいて、我々は仏陀に成長していくのであります。その道を歩むのが

我々の仏道であり、我々の念仏の道であります。

では、阿弥陀如来のご本願をどのように聞くのかというと、親鸞聖人は、

仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。

（『顕浄土真実教行証文類』／『浄土真宗聖典―註釈版―』251頁）

と、こう仰っておられます。

「疑心あることなし」とは「疑う心あることなし」です。これは、単に「疑わない」ということではありません。疑心が有るとか無いとかというレベルを超えているということです。つまりは「ああ、そうですか、そうだったのですね」と聞かせていただくのが、「疑心有ること無し」という聞き方です。要するに、本当のことなのだから疑うも疑わないもないのです。事実の有様を述べたのが仏法であります。事実の有様というのは、「そうだったんですね」と聞くしかないじゃありませんか。

たとえば、「今朝は、お日さまが東から昇ってきて西に沈んでいった。しかし、明日の朝は

どうであろうか？　ひょっとしたら、北の方から上がってくるかしら？　いやいや、私は東の方から昇ってくると信じて疑わない…」なんてね、これは疑うとか信じるというレベルの話ではありませんね。

お日さまというのは、東から昇って西に沈む、そうなっている。われわれが信じているかいないかということとは関係なく、お日さまは東から昇り西に沈んでいく、そういう話です。ですから、真実とか、本当のことというのは、「そうでしたか」と聞いておくしかないのであります。

本当の賢者と大いなる愚者

世の中には、賢い人とそうでない人、賢者と愚者とがおります。

本当の賢者というのは「私が知っていることは、ほんの毛の先ほどのこと。もっと知りたい！もっと教えてくれ！　もっと聞きたい！」と思っておりますから、いくらでも成長するんです。

実は、大いなる愚者というのもこれと同じなのです。「私は何ほどのことも知ってはいない」と思っていますから、教えてくれた人に感謝ができます。「ありがとう！　ようこそ教えてくだ

さった！」と、これが愚者の姿です。本当の賢者、大いなる愚者が素晴らしいのです。

よろしくないのは中途半端な人ですね。「少し賢い」と書いて「小賢しい」と読むでしょう。小賢しいのはよろしくありません。

「私が言うことのどこが間違いだというのだ」と、人の話を聞きません。自分の思うことが正しいのだと言うばかりですから成長もありませんし、感謝もしません。まさに小賢しい知恵です。

平成之大馬鹿門

少なくとも仏さまの話、仏陀の話を聞くという時には「そうでしたか、そうだったんですね」と聞くことになっておるんです。いくら言っても仏さまの智慧に比べたら我々は愚者なんですからね。

平成八年（一九九六）年のことですが、彫刻家の空充秋という方が、佛教大学に石門を寄贈しました。空さんは、その門に「平成之大馬鹿門」と銘を彫られた。ところが、それに対して、「大学の門に、馬鹿などという名前を付けるなんてどういうこっちゃ！」というクレームが出て、

せっかく彫った銘を削り取れという話になりました。空さんは「絶対に削らん！」と真っ向から反対しまして、結局その門を持ち帰られました。そうすると、それを知った全国の企業や自治体から空さんのところに、「素晴らしい門だ！」「その名前を彫ったままくれ！」という申し出が殺到しました。五〇件以上来たそうですが、結局、大馬鹿門は大馬鹿門のままで、兵庫県の千種（ちくさ）町というところにわたりました。今も門は山の頂上にあって、観光名所になっているといいます。

本当は大馬鹿が素晴らしいのです。大愚者が実は一番の賢者なのかもしれません。それなのに、このことを知らない人々から、「大馬鹿門とはどういうこっちゃ！」となってしまった。まぁしょうがないですね。そういう人々も沢山いるのです。

ただし我々は、仏さまの智慧で言われた言葉をそのまま聞いておくんです。私の頭でどう考えられようが、たとえ「これは、ちょっとおかしいのではなかろうか？」と思うことがあろうが、その思いを一旦は差し置いて、休ませておくんです。仏さまの智慧はそのまま聞いておく、ということなんです。そうして、我々は仏さまに育てられることになっておるんです。

そのまま聞いて育てられる

草柳大蔵という人がありました。二〇〇二年にお亡くなりになられた方です。エッセイや評論などを書いていた方です。その草柳さんの書いた書物に、『礼儀覚書』という書があります。その序文に、次のようなことが書いてありました。今はお話ですから、少し脚色して分かりやすいように話してみます。

…昭和二十三年の秋のことでした。大学を出て、私はある雑誌社に勤めておりました。

その日は、朝から雨でした。雑誌社の仕事で、あちこちの原稿を受け取りに歩いてまわっていました。その日の最後に伺ったお宅は、ある国務大臣のお宅でした。

お宅に上がらせてもらい応接間に通していただきました。私は、朝から雨の中を歩き詰めで疲れ切っていたので、体をドカっとソファーに掛けて、なけなしのタバコに火を点け、人が来るのを待っておりました。

そうしておりましたら、隣のドアが開いて大臣の奥さまが入って来られました。噂には聞い

ておりましたが、美しく、まさに白い花束のように見えました。
部屋に入って来られて、「これが主人の原稿です」と原稿を渡してくださいました。私は「そうですか、ありがとうございました」とそれを受け取って帰ろうとしたのですが、奥さまが、「今日は、まだどちらかにお立ち寄りですか?」と仰るので、「いえ、こちらが最後でございます」と答えますと、「そうですか、じゃあお茶でも飲んでいらっしゃいな」と言われましたので、お言葉に甘えることに致しました。
しばらくすると、その頃はまだ珍しかったウイスキーが入ったような紅茶が出てきました。その紅茶を美味しく頂きながら奥さまと話しておりましたら、奥さまが「ところで、つかぬことを聞くようですが、あなたのお父さまは何の仕事をしていらっしゃるのでしょうか」と、そうおたずねになったので、「父は石屋でございます。神社の狛犬を刻んだり、墓石を刻んだりするような、あの石屋をやっておりました」と、こう答えました。
そうすると、しばらく間があって、「そうですか、じゃあこれは参考にまで聞いておいてくださいね。あのね、よそさまのお宅におたずねになって、応接間に通されたとしても、そのお宅のご主人なりが出ていらっしゃるまでは立って待って居るものですよ。そのために、壁に絵

が掛けてあり、花も生けてあるのです。参考までにね」と、こう仰いました。

私はそれを聞いて、（ああ、知らなかった…）と、おそらく耳の端まで真っ赤になっていたでしょう。

…草柳さんはそこで大変恥ずかしい思いをされたというのです。けれども、そこからが草柳さんの素晴らしいところです。…

帰りの電車の中、私は、（ああ！　世の中って素晴らしいじゃないか！　こうやって教えてくれる人もちゃんとあるんだ！）と、キラキラした思いでもって、電車に乗っていました。

そうしてその後、雑誌社を辞めてからは、色んな人の評伝を書いたりと、自分でものを書くようになっていました。

国務大臣のお宅を訪ねてから、二〇数年経った頃に伺ったのが、三菱銀行の会長であった田実渉（じつわたる）という方のお宅でした。いつものように、ソファーには掛けずに立って待っておりました。壁にはジョルジュ・ルオーの絵が掛けてありました。その絵を見ていると、ドアが開き、田実

さんがニコニコとしながら部屋に入って来られました。

「いやー、草柳さん。あなたの書いたものは時々読ませて頂いておりますよ。それで、今日、私は何を喋ればいいのかね？」

こうして取材が始まりました。

田実さんは、とても丁寧な人で、全くもって無駄のない受けこたえをしてくださるお方でした。取材を終え、（ああ、良かった、良い取材ができた）という思いで帰ることができました。

さて、それからまた三年後のことです。人物評伝シリーズの一つとして、中山素平（なかやまそへい）さんの評伝を書くことになりました。『草柳大蔵〈トップ〉対談集』という企画の本です。

この中山素平という方は、「そっぺいさん」と呼ばれて人々に親しまれていた人ですね。日本興業銀行の会長をされて、沢山の企業の起業や救済に尽力された人です。確かハウステンボスの経営に関わって成功させたり、アスキーを経営危機から救ったりというような方です。その中山素平さんとの対談です。

事前に中山さんの周りの人に先に取材をしておいて、最後はご本人から取材をして仕上げねばなりません。

中山さんのお宅にお伺いし、取材がはじまります。この方も田実さんと同じ様に、実に無駄なくお話をされる方でしたので、素晴らしい取材ができました。また、この方も大変丁寧な方で、固有名詞が出てきたら「この『川』という字はね、三本川の『川』の方だよ」と、ちゃんと示してくださるようなお方でありました。

私もまた気を入れて、それこそ鉛筆も折れんばかりに取材をしました。取材が終わり、おいとましましょうと取材道具を片付けておりましたら、先ほどまで取材に応えてくださっていた中山素平さんがこう話し掛けてくださいました。

「草柳さん、実は私はあなたのことをあまり知らなかったので、昨日、三菱の田実さんに聞いてみたんだよ。『明日、草柳君という人が来ることになってるんだけども、どういう人物かね?』と。そしたら、田実さんがね、『彼はね、俺が顔を見せるまでは立って待っておるほどの男ですよ』と、こう言うものだから、これを聞いて、僕は安心して君に会うことにしたんだ。たったそれだけよ。それを聞いたから、安心して君に会うことができたんだ」

…このようなお話です。

草柳さんは、二〇数年前、あの奥さまが教えて下さったことをやっただけでした。それは、「応接間に招き入れられても、ご主人なりが見えるまではソファーに腰をかけずに立って待っておくものですよ」という、ただそれだけのことでした。しかし、草柳さんは「そこに一本の道が見えたような気が致します」というように書いておられます。

私は今、マナーの話をしたいのではありませんよ。マナーなら、ソファーのある部屋ならこうでも、和室ではいつまでもボーっと立っていてはいけませんね。今いいたいのは「マナー」の話ではなく、草柳さんの「聞き方」の話です。草柳さんが、あの奥さまから話を聞いた時に、もし、「石屋のせがれだと思って馬鹿にしやがって…。俺は大恥をかいたではないか…」などというような心で過ごしてきていたならば、このような取材での出来事は起こりませんでしたね。

草柳さんは、奥さまに教えられたときから、（そうなんだ、ちゃんと教えてくれる人が居るんだ、それをやればいいだけなんだ）と、そう聞いて過ごしてこられたのです。それだけのことなのだけど、そこにはちゃんとお育てがあったのです。

我々にも、様々な人が様々な知恵で色んなことを教えてくださいます。ただ人間の話なら時としてダマされることもありましょうが、少なくとも仏さまの話を聞くときは、そのまま聞いてお

くことです。ダマされたとしてもそれは仏さまの言葉ですから、ダマされていてもいいのです。我々は仏の智慧の言葉によって教えられ、そして育てられるのです。

母の知恵

皆さん方の時代ではどうであったかはわかりませんが、私どもの時代では、たとえば子どもの時分、空が曇って雷がゴロゴロピカピカと鳴り出したら、お母さんがどう言うたかというと、「ホラ早うお家の中に入りなさい。お腹にお布団でも掛けときなさい。カミナリさんはね、人間のヘソが大好物でね、おヘソをとって持って帰って食べるらしいよ」と言いました。

幼い頃、すなわち何も知らない頃はそれを聞いて、「それは大変！　カエルさんと同じになってしまう！」と、お母さんの言うことを聞いて、お腹に毛布か布団かを掛けて家に入って大人しくしておりました。

そこから、少し大きくなりものを覚えて賢くなって、というより小賢しくなって、どうなるかというと、お母さんから「カミナリさんがヘソを取るよ」と言われても、「おかあさん。カミナ

リさんなんてものは居ないのですよ。あれはね静電気と一緒でね…」などと、理屈を言うようになるんですね。それを言うても何にもならんのに、理屈を言うようになるんです。

しかし、そこからもっと成長しまして、自分が子を持つようになって、自分自身が親の立場になりますとわかってくるんです。

「ああ、そうだったのか、わが母はああやって私が雷に打たれないように、寝冷えをしないように育ててくれていたのか。私はその母に育てられてきたのか…。カミナリさんが居るか居ないかが問題ではなくて、そこに母の愛があったということが大切なことで、本当のことだった」と思われるようになるのです。

そうしたら、また幼い頃のように、何も知らない愚者に成れるじゃありませんか。そしてわが子に、「カミナリさんがヘソ取るぞ！」とまた言えるじゃありませんか。

これは母の知恵でした。「カミナリさんがヘソ取るぞ！」とは母の知恵からの愛の言葉でした。そしたら、最初から愚か者で良かったじゃありませんか。「ああ、カミナリさんにおヘソ取られたら大変！　カエルさんと同じになってしまう！」と、家に入ってお腹に布団でもかけておれば、ちゃんと雷に打たれないように、寝冷えをしないように、お育てに預かっておったじゃあり

ませんか。「カミナリさんなんていないのよ」なんて言ったところで、何にもなりませんでしたね。そのことが分かってまいります。それが「愚者に成る」ということですかね。

法然聖人と親鸞聖人

我々にも知恵はあります。知恵はありますけれども、仏さまの言葉を聞く時には、それを休ませておくのです。そして、「そうでしたか、そうだったんですね」と、そう聞いておれば、我々はお浄土に生まれさせて頂き仏に成っていくようにお育てにあずかるのです。そのままで我々は育てられるのです。それが私どもの仏法であり、お聴聞の作法です。

このことを、法然聖人が仰ったというのが、最初に拝読しました『一枚起請文』です。これには、「正月二十三日に書いた」と記してあります。法然聖人はその年の正月二十五日にご往生されていますので、その二日前に書かれたか、もしくは口頭で仰ったかされたものということです。ですから、これは法然聖人の遺言ということになります。弟子の勢観房源智に授けたと云われております。

そして、「浄土宗の安心・起行、この一紙に至極せり。源空が所存、このほかにまつたく別義を存ぜず」と、これがわが所存であり、この他のことはないと仰ってお浄土に生まれていかれたのが法然聖人でした。それを、そのまま聞いていかれたのが親鸞聖人です。親鸞聖人のお手紙、ご消息には次のようにあります。

なによりも、去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ。まづ善信（親鸞）が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとは、疑なければ正定聚に住することにて候ふなり。さればこそ愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ。如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとに申され候ひける、すこしもたがはず候ふなり。としごろおのおのに申し候ひしこと、たがはずこそ候へ、かまへて学生沙汰せさせたまひ候はで、往生をとげさせたまひ候ふべし。

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐりたるを御覧じては、「往生必定す

べし」とて、笑ませたまひしをみまゐらせ候ひき。

文沙汰して、さかさかしきひとのまゐりたるをば、「往生はいかがあらんずらん」と、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまでおもひあはせられ候ふなり。

時間もありませんので、傍線の部分だけ読みましょう。法然聖人は、「ものも覚えず、あさましき人々」、知恵なき人々を見ては、「ああ、まちがいなくお浄土へ参られたなあ」と、ニコニコして仰った。逆に、「文を沙汰して、賢賢（さかさか）しい人」、小賢（こざか）しい人の最後を見て、「はたしてこの者の往生はどうだろうか…」と仰ったことを確かに聞いて覚えていますよと、この手紙には書いておられるのです。

いかがです。少なくとも仏さまの智慧は、そのまま聞いておくことにしましょうよ。その時には人間の知恵は少し休ませて、そのまま聞いておくのです。

また親鸞聖人は、知恵が毒だとも仰っています。

如来誓願の薬はよく智愚の毒を滅するなり。

（顕浄土真実教行証文類・信文類／『浄土真宗聖典　註釈版』246頁）

と、如来の誓願の薬は、「知恵の毒」も愚痴無明の毒も滅すると言われているのです。そのご本願を、誓願を聞いて仏になっていく道、これが私どものお念仏の道なのです。

「バカの壁」は「利口の壁」

養老孟司という人が二〇〇三年に『バカの壁』という本を書きました。いまだに売れているようで、通算では五〇〇万部ぐらいは売れているようです。この本のタイトルに「バカの壁」という、その正体は、「自分は結構賢い」という心、言わば「小賢しい知恵の壁」ですね。ですから、これは実は「バカの壁」じゃなくて「利口の壁」「賢いの壁」なんですね。

そしてテレビで見たか何かで読んだのだったか、ちょっと忘れてしまいましたが、養老孟子さんは、「私が今まで研究してきたことは既に二五〇〇年前に仏教が言っていたことだったと気付いた」というようなことを語っていらっしゃいました。

（※養老孟司『真っ赤なウソ』二〇〇四年・ＰＨＰ研究所刊・参照）

仏さまの智慧は、まずはそのままに受けいれておきましょう。そしてブッダに成って往く道を生きてゆく、これが私どもの人生です。これが私どものお念仏の仏道であります。

本日の話はここまでにいたします、ようこそお聴聞下さいました。

称　名

（文責在宗教部）

本書の刊行にあたり、快くご協力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

現在も続いているコロナ禍において、法話や講演の場に足を運ぶということは簡単ではありません。宗教部といたしましても、現場で教えを聞いてほしいという思いと感染拡大を防ぎたいという思いとのジレンマに苦しんでまいりました。

たとえ現場に足を運ぶことが出来なくとも、みなさまがこの冊子を通して「そのままの救い」に出あい、喜んでくださることを願っております。

（宗教部）

そのままの救い

「りゅうこくブックス」No.135

二〇二一年十月十八日　発行

編輯
発行　龍谷大学宗教部

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

浄土真宗はじめの一歩　能美潤史
ものみな金色（こんじき）に輝く　徳永一道
「仏教を理念とする社会実践」
～自死・気候危機への対応　竹本了悟
半身の死を生きる　川添泰信
お釈迦さまからのメッセージ
―生きるということ―　内藤昭文
唯信仏語 ―愚者に落居する―　深川宣暢